
失敗した召喚（仮）

虎馬

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

失敗した召喚（仮）

【Nコード】

N0967V

【作者名】

虎馬

【あらすじ】

「ある意味チートな平凡さ」と言われる私、仙台千草はある日、異世界に召喚される。「勇者」を召喚する儀式で呼ばれたらしい。しかし、私を呼び出した人間は言った——「これは違う!」……召喚の儀式を間違えたらしい。しかもその後の儀式でも失敗続き。ようやく成功したらしい儀式で呼び出された勇者一行はみんなにちやほやされながら連れて行かれた。「……放置されたね……」

間違えて呼ばれた、既存のスペックでなんとかなっちゃう世界の裏道を突き進む物語。勢いで書いているご都合主義、チ

ート込々ファンタジーです。

題名は変わる可能性があります。

人物紹介。(前書き)

ざっくりと。

ネタバレ含みます。

人物紹介。

主人公の一行

仙台^{センダイ} 千草^{チクサ} 20

平凡な文型大学生。英文科所属。

本人は平凡極まりないが、人生はそうでもなかったらしい。
非凡への耐性が強い。

御橋^{ミハシ} 恵美理^{エミリ} 18

フランス人の血が四分の一入っている美少女。

四分の三は日本人のはずなのに見た目金髪に青いお目々の外国人。
お金持ちのお家のお嬢様らしいが、ちょっと驚く位たくましい。

阿部^{アベ} 白兔^{ハクト} 15

黒髪黒目のパツと見和風美少女な美少年。髪型はおかっぱ。

中学入学まで親の転勤でドイツに住んでいた。

古文に興味があるらしい。ご先祖様がちよつと特殊。

勇者様ご一行

光本^{コウモト} 勇人^{ユウト} 17

真の勇者様。

なんか色々使命があるらしい。

額に勇者の証である「光の印」と呼ばれる痣があるらしい。

明城^{アカギ} 天音^{アマネ} 17

真の勇者と共に現れし聖女様。

やっぱりこの人もなんか色々使命があるらしい。

胸に聖女の証である「光の華」と呼ばれる痣があるらしい。

アカギ
明城 ノエル
聖夜 16

真の勇者と共に現れし賢者様。

この人もなんか色々（略

右腕に賢者の証である「光の道」と呼ばれる（略

その他にも「こっち」の世界で選ばれた人数人がパーティーに参加。

人物紹介。（後書き）

追々何か付け足すかもしれません。

プロローグ。

『どういうことだ！これは違うではないか！』

目を開いて、一番初めに耳に入っただのはそんな一言だった。訳わからん。誰このおじいちゃん。それが私の感想だった。

*

私、仙台千草^{せんたい ちくさ}は「どこにでもいるようで、むしろ中々見つからない、ある意味チートスペック」と友人に言われる程、平凡な規格の人間である。

生まれた時の身長は五十センチメートルちょうど、体重もピツタリ三千グラム。生後、正確に五か月経った日に初めての寝返りをしたという、家庭科の教科書通りの成長をして見せた。

小学校の通信簿では、全ての項目に「とてもよくできています・よくできています・もうすこしががんばりましょう」の三段階のうち「よくできています」の項目にのみ丸があった。一列に並ぶそれを見て、母は毎度感嘆の息をついていたものだった。ちなみに生活態度は全て最高評価だった。特に目立った問題行動がなければ大抵そうなる。担任からの通信欄には「グループ行動の中で、誰とでも上手に交流できる子です」というようなことが六年間、様々な表現方法で書かれていた。

中学・高校時代は成績評価が五段階になり、私の通知表には毎度4と3が同数並び、評定平均3.5という、正に「平均」の成績を六年間取り続けた。勿論人並みの努力の結果として、である。

現在は公立の大学の英文科に籍を置き、二年目。一年目の成績表には良と可がずらりと並び、優も3つ取った。（まあ、その三つ

はよほどのことがない限りみんな優の評価がもらえる授業だったのだが……）他の学生たちの中に埋没しつつ、中だるみの雰囲気を感じながら、日々を過ごしている。

そんな、私個人は本当に、平凡な人間以外の何者でもない存在だったのである。

それが覆されそうになったのはある台風の日の朝。大学が全学部休講になり、一人暮らしの部屋でうだうだしている時だった。

唐突に、何をしていたわけでもないのに、本当に唐突に、視界が黒に浸食され、私は意識を失った。

*

体がゆらゆらと揺れている感覚がして、私は意識を浮上させた。目を開いたつもりだったが視界は黒一色のままで、頭が混乱した。何が起きているのか、まったくわからない。耳には一つも音が入ってこない。

視覚と聴覚に何も感じられないのに、感触だけはあった。私は自分の体が液体の中に浮いているのを感じていた。たとえば、プールで力を抜いてただ浮いている時のように。混乱に体を固まらせると、途端に体が沈み、口と鼻に液体が流れ込んできた。

ただただ静かな闇の中。

それは、恐怖以外の何物でもなかった。

私は音のない暗闇でもがき、苦しみながら、底へ、底へ沈んでいった。

＊

再び閉じた意識が戻ったのは、瞼の裏から光を感じたからだだった。何人かの人間の声や衣擦れの音、何か固いものを軽くぶつけ合うような音が聞こえる。

私は安堵の息をつきながら目を開けた。

そして、話は冒頭に戻る。

1。

真っ黒な視界から一転、現在私の目の前には色があふれていた。
白と金色と銀色で彩られた壁にぐるりと囲まれている丸い部屋の
中心に私は立っていて、周囲にはおそろいの白くて長い服を身に着
け、一人ひとり色の違うストールのようなものを肩にかけている人
たちがいる。

私は瞬きをして目の前に立っている人間（だと思う）を見た。
金色のストールの、真っ白な髪の毛をポニーテールにした、なか
なかにお歳を召していると思われる男の人（まあ、つまりはおじい
ちゃん）が、私を見て、目を見開いていた。

なんだなんだ、私、あれか。召喚された？「おお！お待ちしてお
りました勇者殿！」みたいな感じ？ついに私も脱平凡人間するの
かしら。ぶっちゃけ私のスペックで半端な特殊設定付けられても、却
って没個性的になっちゃうからね？そのところよろしくね？相当壮
大な使命と主人公特典を付属してくれないと。と、言う感じの考え
が脳内を駆け巡った。この間、半秒って感じだろうか。

まあ、そんな期待（？）は次の瞬間のおじいちゃんの言葉でめっ
ためたに崩された。

「What's this!? This is not we
called! Not we needed!」

なんだここ、英語圏？

英語圏に呼び出されたの、私？半端にもほどがあるだろう。
てか、人のことWhatとかThisとか言うの、すごいむかつ

く。モノ扱い？ちなみにおじいちゃんの言っている言葉を日本語に訳すとこんな感じだ。

「なんだこれは！？これは我々が呼んだものじゃないぞ！我々の求めたものと違う！」

……人を馬鹿にしているにもほどがあるだろう。失礼極まりないつて、こういうことだったんだ、と思った。ほんと、失礼を極めるよ。逆に感心しちゃうよ。勝手に人を呼び出しというて何。

『ゼロさま、もしや、これは……』

これは違う、だの、何が起こった、だのぶつぶつ言っているおじいちゃんに、隣にいた緑のストールの金髪兄ちゃんが何か言う。（やっぱり英語だ）おじいちゃん、ゼロさんっていうらしい。

『なんだと！？ツー、儀式が間違っていたというのか！？』

おじいちゃん（……ゼロでいつか）が叫ぶ。

腹に響く重低音で、なんだか体に振動が来る。やめてくれ。

『そ、そうとしか思えません……』

ツーと呼ばれた兄ちゃんが少々涙目になって言う。

ゼロは険しい顔をしている。まあ、私が目を開けた時からそんな顔だから、普段もそうなのかもしれないけど。ツー涙目つてことは普段より険しい顔なんじゃないかな。

『ゼロさま、私もそうだと………そういうえば、先ほどの発音を間違えたような気がします』

ゼロのツーとは反対の隣にいた銀色のストールのおじいちゃんが言う。

『ワン……またか。いい加減発音の間違いをなくせ。何年魔法使いをしていると思っっているんだ』

ゼロが銀色のストールのおじちゃん（ワンって呼ばれてた。たぶんこれ012の1（one）だよ。ちょっと安易すぎると思う）をにらむ。

『すみません』

『それでは……』

『ああ。では……』

さっきから私をほっぽって話が進んでいるけど、どうしたらいいんだろう。

周りにいた他の人たちもゼロたちのほうに集まって、何やら話し合いをしている。

居心地悪い。

と、思ったら、ゼロさんがこちらを向いた。私を指さして、黄色いストールの人に言う。

『イレブン、あれをわきに除ける』

『はい』

ちよつとマッチョなイレブンと呼ばれた兄ちゃんが私の方に来て、なんの前置きもなく私を持ち上げた。

「は、え、うえええええええ！？」

『うるさいな。イレブン、儀式の邪魔になる。声を封じておけ。ついでに、動きもな』

『はい』

ぼいつ、と、本当に無造作に床に転がされ、文句を言おうと思つてイレブンとか言うのをにらみあげると、「カルム」とかなんとか言われて、口から言葉が出なくなっていた。

……は？なにこれ。

私が混乱している間に、もう一度、なんかむにゃむにゃと言われ、今度はぴき、と体が固まった。

どうやら本当に言葉と動きを封じられてしまったらしい。
なにこれ。私の人権どこ行った。

もし私がちゃんとおうち帰れたら、（てか帰れなくても何とかなるかもしれないけど、家族に会えたら）覚えとけよ。虎の威を借り狐は怖いんだぞ。私は平凡だけど、それが際立つ人間の中にいるからこれが個性になんだからな。と、動けないので内心で歯をぎりぎりと食いしばりながら、再び円になって何やらむにゃむにゃ言い出したストール集団を見ていたのだった。

1。(後書き)

「失礼」を極めたストール集団。
「wizard」と言う単語だったので、「魔法使い」と千草は訳
したようです。

2。

眠い。

どれくらいの時間が経過しただろうか。

情けなのかなんなのかわからないがなぜか唯一動かせる瞼の重みに負けそうになっている自分がいた。や、まあ、考えられるし息もできるから内臓は動いてるはずだけどね。

円になったストール集団はむにやむにやと声を合わせるように何かを唱え、手に持った杖つばい棒で床を同時に突く。こーん、こーん、という音が重なってまるでこの場が揺れているようだ。

（この音だ）

私は目覚める瞬間に聞いた音の正体を知った。
そしてしばらく沈黙の時間がある。

「We failed again」

ゼロが「また失敗だ」と暗い声で言う。

（またか……）

この調子でかれこれ何十回目だろうか、二十四辺りで数えるのはやめてしまったが多分四十回目は超えているだろう。

どうも、何かの儀式がうまくいっていないらしい。私を見て「これは違う」と言っていたから、きっと何か・誰かを召喚する儀式なんだろう。

さつさと成功させて私の拘束を解いてほしいのにずっとこの調子だ。

私が転がされているのは壁際で、ゼロの斜め後ろ位の場所だ。こ

こは黄色のストールの、細マッチョよりも少しマッチョ度の高い、人の人権を無視しまくった怪しい術をかけてくださりやがったイレブンとか呼ばれてた男が正面に見える。さっきからこいつゼロが失敗したことに暗い声で唸る度「あっちゃー」とでも言うように頬をかくのだ。無表情で。

間違いない。イレブンが原因だ。時折「すみません、やはり発音が……」とか言うワンのおじちゃんの声が聞こえるが、犯人こいつです。何を間違ってるのか知らないけど、さつさと気付いてほしい。動けないし、話せないし、さっきから睡魔がランデブーのお誘いにきてる。いやだ。私はこのストール集団に文句を言ってやりたいの。寝ないんだから。あ、でもちゃんと術は解いてもらえるのだろうか。解除してもらえないと困るぞ。おい。

『ゼロ様、もうそろそろ日没です』

上の方から声が降ってきた。

見上げて確認したいが、動けないのでできない。斜め前にいるゼロ口上の方を向いて焦ったように声を上げた。

『何、もうか。皆の者、これが今日最後のチャンスだ。何としても成功させるのだ』

そしてもう一度儀式が始まる。

円になったストール集団はむにやむにやと声を合わせるように何かを唱え、手に持った杖っぽい棒で床を同時に突く。こーん、こーん、という音が重なってまるでこの場が揺れているようだ。

先ほどまでと変わらない、しかしどこか必死な雰囲気で杖が床を突く。つるつるとした石っぽい素材に傷がつくんじやないかと思うけれど、気にしている様子はない。

音が止んだ。

また沈黙の時間が流れる、と思った瞬間、ストール集団の円の中に光の柱が立った。

ストール集団がざわめく。私は声は出せないが目を見開いた。が、すぐに閉じることになる。

唐突に風が吹き荒れて、まるでその風に流されるように光の柱が徐々に散っていく。凝視していると目が乾いて、すごく痛い。

薄目を開けて見ていると、光の中に人影が見えた。

やはり誰かを召喚する儀式だったらしい。しかも、一人じゃない。二人いる。

やがて、光が晴れて（変な表現だが……）、その人影の人物をしっかりと見ることができた。

そして私は息をのむ。

それはまるで、光と闇の対比のようだった。

柔らかく弧を描きながら腰まで伸びた髪は、壁の装飾の金色も銀色もかすむほど見事な黄金色。

顎のラインでまっすぐに揃えられた髪は、人の髪色としてあり得ないはずの正しく鴉の濡羽色。

驚きに見開かれた大きな瞳は晴れた秋の空のような青。

不安からか、伏せられた瞳は月のない夜空のごとき黒。

二人とも肌は透明感のある白で、各々の持つ色を強調する。

（この二人だ）

私は直感した。

この二人がストール集団が召喚しようとしていた存在だ、と。

「My god!!」

感極まったのか、ゼロが両腕を広げて「神よ!!」と叫ぶ。
仕方あるまい。こんなに完璧な雰囲気を持った二人組だ。

「We made a mistake again!!」

……。

……。

……は？

え、「また間違えた」って何。あ、イレブンがまた頬をかいてる。
はい？うそでしょ？この二人も間違えて呼び出されちゃったの。私
と同じ被害者？どっいうことなの。なんなの。何が起きているの。

3。

あてになんないな、私の直感。

混乱する私を置いて、ストール集団はすっかり落ち込んだ様子でゼロの周りに集まり、何やら話している。

中心に放置されたままの二人は状況についていけないのだろう、固まったまま動かない。

『とりあえず、今ここで話していても何にもならぬ。一度戻るぞ。また明日、再び』

ゼロの声が私の耳に届く。

どうやら今日はこれで終わりのようだ。イレブンが私の方へ歩いてきて、何かを言う。なんか聞き覚えのあるような気がしないでもないが、なんだろう。とか思っていたら、ふ、と体の力が抜けるような感覚があり、私の腕が動いた。

急なことだったので、すぐには反応できず、私はべしゃり、と床に突っ伏した。

（体が動くようになった！）

そう気付いた瞬間、私はストール集団に文句を言っただけのために顔を上げた。そして、固まった。

ストール集団は何かブツブツ呟きながら浮いていた。

浮いてる。人が。スウーって上に向かっていくよ。あ、上の方に途中で途切れた螺旋階段がある。そうか、そこが出口なのね。私は出れないってことね。飛べる人だけが出入り自由なの。さっきの上

からの声はそこからか。納得。って、どんだけファンタジーなの。
あ、いやいや最初からファンタジー一色だったわ。

とかなんとかつらつら考えていると、最後の一人、つまり私にか
けていた術を解除していたために一人出遅れたイレブンが螺旋階段
にたどり着き、そのままのぼって行ってしまった。

「しまった、文句を言い忘れた」

自分の喉をふるわせられることに若干感動しながらつぶやくと、
部屋を中心にいた二人の視線がこちらを向いた。

大きな青い目が揺れていた。

「大丈夫？急に呼び出されたんでしょう？怖かったね」

慌てて駆け寄りながら話しかけると、青い目からついに大粒の水
滴が零れ落ちた。

声も出さずに、ひざから崩れ落ちるように蹲ってしまった。

思わず私も膝について彼女を抱きしめた。自分がこちらに来てし
まった時の、あの暗く苦しい瞬間を思い出す。怖かったね。

「あの」

頭上で声がする。

顔を上げると、黒曜石と目があった。間違えた、黒い瞳と目があ
った。

「ここはどこで、なにが起きたのでしょうか。貴女方は誰ですか」

無表情で首をかしげる。さらり、ときれいな黒髪が流れた。

私は首を振った。

「ごめん、私もわからない。多分、さっきの連中に召喚されちゃったんじゃないかな」

「しょうかん？」

「うん、ごめんねファンタジーな答えで。でも、私この答以外に何も思いつかないの。元いた場所と全然違う場所に急に移動したり、目の前の誰もいなかったところに光と一緒に人が現れたりするような現象、ファンタジー以外ならテレポーテーション？でもそれもSF、結局ファンタジーじゃない？それにね、私、自分でファンタジーとか言っついてなんだけど、魔法とかそういうの幻想だとは思ってないのよね。あ、痛い人とか思わないでね。今の状況、ある意味混乱はしてるけど混乱せずにやり過ぐすにはファンタジーな存在を認めることが必要だと思うわけ。だから、君も、んで金色の君もまずは落ち着こうか。そして自己紹介と今後のことを話しましょう。多分あのストール集団あてにならないわ。私の直感あてにならないってつい今しがた判明したんだけどね？でも『失敗だー』って言った後に失敗で呼んじゃったっぽい私をそのまま人権無視なサナギ状態にして放置してたことを考えると、私たちって失敗で出てきた不用品扱いみたいだし。あ、なんかム力ついてきた。でもまあ今そう決めつけるのはよくないかしら。でもね、これだけははっきりしてるの。私たちこれから少なくとも明日の朝までここで放置よ。つまり明日またあの連中が来るまでは間違いなく私たち三人は運命共同体なの。あ、泣き止んだね。じゃ、部屋の真ん中にいるのもなんだし、壁の方に行こうよ」

とりあえず「召喚」というファンタジーワードに動揺したらしい黒髪の子に畳み掛けるように言葉をつなげた。自分でも何言ってるかわからないくらい、ひたすら口のまわるままに任せてしゃべり続けていたら、黒の髪の子は青くなった顔を回復させ、ぽかん、

と間の抜けた感じの表情になった。でもなんていえばいいんだろう。
……美人はどんな表情でも美人よね！

ついでに私の腕の中でほとほと涙を落としていた金髪の子もマシガントークに涙が引つ込んだようだ。よかったよかった。彼女の背をさすりながら立たせ、壁際まで腕を引いた。

「じゃ、まずは私から」

そう言いながら、私は二人の顔を見る。二人とも、ちょっと驚きの美人さんである。ブラウン管の向こう側？ いえいえ、キャンバスの向こう側です。みたいな。え、ちよつと、神様念入りに造形しすぎじゃない？ って感じの。しかも系統違い。つまり、ここでも私は「平凡」であるが故にそれが個性的なんですね。了解です。ちよつと遠い目になる。

「あの？」

遠い目になりながら黙ってしまった私を黒髪の子が覗き込む。まっすぐに切りそろえられている髪は艶やかな漆黒で、黒曜石がはめられているような切れ長の目は涼やか。す、つと通った鼻は純日本人と言った感じの慎ましさで、しかし決して低くはない。唇は紅を引いたかのように赤く色づいているが、間違いなく天然。日本人形のような、という形容があるが、この子を真似て日本人形を作ったのでは、と思わせる、完成された和風美少女だ。

「ああ、ごめんなさい。私の名前は仙台千草。大学生やつてる二十歳です」

「え、年上？」

思わず、と言うように金髪の子が言葉を零した。「うん、年上ー」と私は笑いかける。仕方ない。これは、仕方ない。彼女を見ながら私は思う。柔らかく波打つ金色に包まれた彼女は、黒髪の子が日本人形なら、西洋人形そのものである。私がそうなるにはつけまっげをいくつ重ねればいいですか、と問いたくなるような密度のこれ

また金色のまつ毛に縁取られた大きな目は未だ残る涙できらつきら輝く、さながらサファイア。形の整った鼻は高く、桃色の唇はふつくらと。日本人よりも凹凸のある顔は、二十歳でも十分に、いや、多分もつと誤魔化しても行けるかもしれない、それくらい大人びて見える。

まあ、服装セーラー服ですけどね。手には学生に人気のブランドの学生鞆。私が見た目まるつきり外国人な彼女に初めから日本語で話しているのはこれが理由だ。

しかし、彼女はすっぴんのようなのだが、学生鞆についているキーホルダーやきれいに整えられている爪から考えるに、彼女の周りの子たちは大抵クラスに三人くらいいる、いけいけ（死語かしら）系なんじゃないかと思う。きつとお化粧もしているだろう。すっぴんの私じゃ多分色々負けていても仕方がない。

「あ、あたしは御橋恵美理^{みはし えみり}。高三で十八です」

受験生かー。しかも百パーセント日本人な名前である。

「僕は阿部白兔^{あへ はくと}。中三で十五です」

この子も受験生かー。……て、『僕』？

「あの、えーと、恵美理ちゃんと、白兔……くん？でオーケー？」

「はい。よろしく願います、千草さん」

恵美理ちゃんがニコ、と笑って答える。

「ええ。紛らわしい見た目でごめんなさい」

白兔くんがぐすり、と苦笑して答える。

私は、とても大人な「美少年」に土下座した。

4。

硬い床に、向かい合って座って話してわかったこと。

いち、見た目100パーセント外国人な恵美理ちゃんは75パーセント日本人だった。フランス人のおばあちゃんのお名前「エミリー」さんから「恵美理」ちゃんと名づけられたらしい。

に、二人は学生で、今日は台風が朝早いうちに過ぎていったので学校に行っていたらしい。家でごろごろしていた私はちょっと肩身が狭い。

さん、つまり、二人は荷物を持っている。手ぶらは私だけ。白兔くんの学校は私服らしく、制服なのは恵美理ちゃんのみ。

し、そんな恵美理ちゃんの荷物には、ひざ掛けと生物・数学の教科書と電子辞書、ペン一本、それとお菓子しか入っていなかった。

「高校三年生、これでいいの？」

カップ入りの細長いジャガイモ菓子を一つ開けて三人でぽりぽり食べながら私は思わず問うた。実際彼女の学際鞆の半分を占めるお菓子のほかで何とか空腹を和らげられることが判明したので、私たちとしてはありがたいことこの上ないのだが。ノートもメモ帳も筆箱もないのはどうなんだろうか。携帯電話はスカートのポケットから出てきた。

「いいんです。他の科目のは置き勉強してるから」

いいんだろうか。私も自分が高三だった時を思い浮かべる。

えーと……教科書は全科目置き勉強してノートと筆箱、副教材とお弁当を鞆に入れて通学していた。

結論、人のことは言えないかも知れない。しかし、家に兄妹たちの使っていた教科書があったからそうしていたのであって……恵美

理ちゃんも実は上がいるということだろうか。教科書二冊は鞆に入っているようだ。

「恵美理さんは、お兄さんかお姉さんがおられるのですか？」

同じことを思ったらしい白兔くんが尋ねる。

「え、いないわよ。あたし一番上だもの」

ぱちくりと瞬きして、けろりと答える恵美理ちゃん。白兔くんも瞬きぱちくり。

「それより、あたしには白兔のカバンが驚きだわ。なんなのそれ。あんた何に挑戦してるの。通学路重量運搬新記録？」

「え、」

固まった白兔君のエナメルカバンには筆箱と英国数社理の教材とそれぞれにノート二冊、紙の英和辞書と古語辞典、あとブックカバーのついたハードカバー本が三冊に文庫本が五冊。それに、携帯電話と空っぽのお弁当箱。もう一つある荷物には体育が中止になってしまい未使用のままだという体操服（半袖Ｔシャツ、半ズボン、ジャージ上下）とタオル二枚に大きめの水筒。

ほっそりとした白兔くんは、これらを持って立っていたのだ。あまりにも軽々と扱っているので、持たせてもらってみると、がくんと力が抜けて床に崩れ落ちてしまった。これは「ああ、男の子なんだなあ」ではすまない気がする。

「白兔くんすっごい力持ちよね。何部だったの？」

「えっと、一年の頃は古典文芸部で、二年からは帰宅部です」

はにかみながら白兔くんが言う。何、古典文芸部って。私のいた中学高校ではそういう部活動はなかった。ちょっと次元の向こう側に心を注ぎすぎている人たちの集う、文芸部という名の魔窟なら、高校にあったが。

「なにその頭痛くなりそうな部活」

恵美理ちゃんは多分理系なのだろう。眉をしかめている。

白兔くんは反対に目を輝かせて、語りだす。

「古典文芸部はその名の通り、古典文芸を読んだり、それについて学んだりする部活なんです。日本は竹取物語から比較的近代のものまで、中国の水滸伝や封神演義、イギリスならシェークスピア、各々が自分の興味の惹かれたものを自由に選択して、教師や、時に大学教授に質問をして、自分なりにその本を読みこんで、ほかの部員と意見などを交し合う部なんです。僕は日本の古典に惹かれて入って、主に平安時代のものを読んでいた。運がいいことに僕がいる学校の国語教師に大学院時代に源氏物語と枕草子を中心とした文学研究をしておられた方がいらっしやったので、すごく有意義な部活動ができていたんです」

「へえ」

恵美理ちゃんが頬を引きつらせている。私も一応笑顔は保っているが、内心同じような表情である。なんだそのハイレベル文化部。ひと月前までランドセル背負ってたはずの子がそんなディープリな世界に……。

「でも、あんたそれでなんで辞めたの？その先生もういないわけ？」
「辞めたわけじゃないんです。部がなくなってしまつて……先生も転出なさいましたし……」

きらきらのおめめが一転、ずーんと暗くなる。地雷だった。

「先輩方が引退されて、部員が僕だけになってしまつて……二年になつた当初はたくさん部員さんが入っていらしたんですが、ひと月もたたないうちに皆退部されて……」

ずももも、と何やら暗雲が立ち込めているような気がする……。

「ご、ごめん！話題が悪かつたわ！この話は終わりましたよ。次、次！落ち込むのやめて！」

恵美理ちゃんが白兎くんの方を掴んでゆする。

はっとしたように白兎くんが目を開き、恥ずかしそうに目を伏せた。

「すみません……つい、取り乱してしまいました」

白兔くんは古典おたくさんのようである。

「いや、とても興味深かったから。いつかもう少し教えてね」

私は言う。本心である。私も一応文系で、国語が大学受験の科目にもばっちりと入っていたが、古典にはひたすら苦しめられた。なぜ今これを読める必要が……！と嘆いたものだ。漢文は何となく文法が英語に似ていたのでまじだったが、すっかり今の日本語とは宇宙語のような差異がある古文は意味が分からなかった。あれをそんなに心の底から楽しめたなら、高三の九月から年明けまでのあの苦しい期間はもう少しましだったのではないか、と思う。
ぜひ、白兔くんの心理が知りたい。

「はいっ」

白兔くんはまるで花が綻ぶように、本当に綺麗に笑った。

その横で、恵美理ちゃんがまるで宇宙人を見るような、理解できない、と言う感じの形容し難い、しかしなお美しい顔で私を見ていた。

そんなに古典が苦手なの？

5。

なんだかんだで朝が来たらしい。説明は省いたが、省いただけの理由はあるのだ。美少女、美少年の可憐な口から次々と語られる生理現象への対策はどうするか、などといった場面の描写は私にはできない。その場では結構衝撃を受けながらも流されていたけれど、時間のたった今は頭を抱えてしまいそうになる。あれは深夜のテンションだった。

とにかく、硬い床の上にパーカーを丸めたものを枕にして眠っていた私は「こーん、こーん」という、なにやらデジャヴな騒音に目を覚ました。が、それで動作は終了した。

（ま、また術かけられてる……！）

眼球を動かすだけで見える範囲を確認して、私は心の中で唸り声をあげた。

昨日と同じように、色違いのストールを肩にかけた集団が円になり、真剣な顔で床を突いている。

しばらく沈黙し、再びむにゃむにゃと言葉が聞こえ始める。また失敗したのか。

恵美理ちゃんと白兔くんはぎりぎり視界に入る位置にはいるのだが、恵美理ちゃんは背中、白兔くんは足しか見えない。多分二人も同じように術がかけられているだろうから、背中や足では起きているかどうかは確認できない。

むにゃむにゃ言葉が途切れて、ストール集団は再び床を叩きはじめる。

そして、光が現れた。

恵美理ちゃんたちが現れたときとは違い、ストール集団の一人一人の持つ杖が突いた床から、まるで噴水のように光があふれる。

一度高く、高く昇った光はやがて渦を巻くように中央に集束し、大きな球体となった。

時折火花のように小さな光のかけらを零しながら光の球がストール集団たちの囲む円の中心に降りてくる。

糸の玉が解けるように、徐々に光の球は小さくなってゆき、そこに人影があるのがわかった。

『おお！成功だ！』

『我らの悪を打ち倒す方……！』

ストール集団が声をあげる。

そこには、三人の人がいた。「ああ、これは『光の勇者様』だな」と、私は思った。直感でも何でもなく、むしろ少し拍子抜けに思いながら、戸惑うように周りを見ているらしい、中央に立つ三人を見ていた。

その三人は、光っていた。
輝いていた。

物理的に。

恵美理ちゃんや、白兎くんのような、美人オーラの輝きではなく。一人は頭から、一人は胸のあたりから、そして、もう一人は片腕から光があふれていて、眩しくて顔なんて判断できない。

ゼロが、三人に近づき、頭が光っている人（頭皮的な意味ではない）の前で跪き、厳かな声で言う。

『お待ちしてりました、我らが悪を打ち倒す方よ。どうか、我らをお救いください』

頭が光っている人が驚いたようにのけ反る。『ええっ！何を打ち倒すって！？』という男声が聞こえた。流ちょうな英語だった。（「Huh!? Beating, what!?’ってかんじだ）ワンのおじちゃんがゼロの後ろに立ち、両手を軽く広げて言う。

『突然の召喚に驚かれておられるでしょう。まずは我らと共に城においでください。ご説明いたします。さ、聖女さまと賢者さまも一緒に』

『勇者さま方に椅子を！』

『どうぞ、勇者さま、おかけください』

『聖女さまはこちらへ』

『この椅子におかけください、賢者さま』

三人ずつ、固まったストール集団の間に、よく絵画の中などでみられるような、物々しい椅子が現れる。その椅子までゼロ、ワンのおじちゃん、ツ一の兄ちゃんがそれぞれ光ってる人たちの手を引いて行く。

『さあ、参りましょう』

ゼロが言い、再びストール集団はぶつぶつと何やら呟きだした。
三人の座った椅子と、ストール集団が宙に浮き、全員私の視界から消えた。

全員、私の視界から消えた。

今日もそうかは知らないが、昨日、私に術をかけていたイレブンもいなくなった。

私の体は動かない。

(さ、最悪な形で放置されたあ—————!!!!)

（最悪だ。なにあの連中。人殺すつもりなの。忘れていったの。どっちなの。どちらにしてもひど過ぎるでしょう！）

私は瞬きしかすることのない状況でひたすらにストール集団への恨みを重ねていた。

硬い石の床の上、体の動かせない私。そして、鳴る腹。

内臓は動いているので、腹は鳴る。昨日の昼前位に呼び出されてから、今までの間に口にしたのは、昨日の晩のジャガイモ菓子少々のみ。早くも胃袋は空っぽだ。

このままでは私の行く先は餓死である。

（いやよいやよいやよ！なんであんな失礼を極めた集団のせいで死ななきゃなんないの！？なにが「でいすいずな」とわつというーに「でいっど」よ！だれがでいすよ！あんな人を人と思わない連中のせいで死ぬなんて、あり得ない。冗談じゃないわよっ）

心の中では叫びまくっているが、現実には何もできない。

あんまりな状況に、死への恐怖より先にストール集団への怒りから、涙が滲む。顔に力が入れられないので、涎と鼻水も出てきてしまった。やばい。止めたい。止められない。

頭に血が上り、がんがんと頭痛が襲ってくる。

文字通り運命共同体な二人は今、どんな思いなのだろうか、と、胸が潰れる思いがした、その時だった。

「――！！！！」

恵美理ちゃんの声が、響いた。

視界の隅に移る背中が動き、恵美理ちゃんはこちらを向いた。そして、私と目を合わせて、目を見開いた。

（え、驚きたいのは私なんだけど。なんで君動けてるの）

私が目をはちくりさせると、恵美理ちゃんは頭の下に敷いていたタオルを掴んで立ち上がり、私の方へ駆け寄ってきた。

「千草さん、大丈夫!？」

恵美理ちゃんは私の顔にタオルを押し当て、また叫ぶ。

「――!」

その言葉の響きは、ストール集団の意味の分からない言葉によく似ていた。

ふ、と力の抜けるような感覚があり、私は動けるようになっていた。

足しか見えていなかった白兎くんも、もそり、と動き、こちらを見て、ぎよっとしたような顔をする。

（ああ、そうか、今の私の顔……）

私は恥ずかしくなり、タオルに顔をうずめて俯く。そうだった。顔から汁という汁が出ていたのだった。

白兎くんが振り向いたときには顔の下半分はタオルで隠れていたが、恵美理ちゃんにはばっちり見てしまって、慌ててタオルを押し当ててくれたのだろう。申し訳ない。

顔を拭い、上げる。二人が心配そうに私を見ていた。一番年上だというのに、情けない。

「あー白兔くん、ごめんね。タオル汚しちゃって……」

私が言うと、白兔くんは首を横に振り、気にしないと言ってくれた。

「大丈夫ですか、千草さん？」

恵美理ちゃんが私の顔を覗き込む。物理的にはさっきの三人組の方が光っていたはずなのだが、今の恵美理ちゃんの方が眩しいように思える。

「大丈夫。なんか、ム力ついて、涙が出ちゃってねー」

私は手を振りながら二人に話す。

「だって、あの連中、人の人権無視した術仕掛けた上に、放置ですよ？頭にきちゃった」

私の言葉に、白兔くんと恵美理ちゃんが首をかしげる。

（あれ？）

少しの沈黙。

やがて、何かに気付いたらしい白兔くんがぼん、と手を打った。

「ああ、あの金縛りは、あの人たちのせいだったんですね？」

起きたら動けなくなっていたので、なんだろう、と思っていたらしい。私は昨日経験しているからストール集団のせいだと知っていたが、二人は知らなかったのだ。私の言葉で初めて知ったのなら、あの反応にも合点がいく。

合点がいったので、頷いていると、恵美理ちゃんがまた首をかしげて、言った。

「え、『あの人』って？この子たち以外に誰かいたの？」

「へ、」

「この子？」

ぽかん、と口を開ける私たちに、恵美理ちゃんはきよろきよろと周りを見回して、言う。

「え、だから、この子たち……って、もしかして、千草さんたち、見えてない？」

周りを見渡す。

結構広い円い空間。

白兔さんと目が合い、頷く。

「私と、君たち二人の三人しかここにはいないよね？」

「僕もそう思います」

「ええ！？この子たちよ！？」

恵美理ちゃんがあちらこちらを指さしながら言う。

私には何も見えない。指の先を目で追って行っても、壁しかない。白兔くんも同じようだ。

「恵美理ちゃん……」

「なにが見えているのですか……？」

7。

「なにつて……なにかしら？そういえば」

恵美理ちゃんが真横を見て言う。虚空を見ているようだが、視線はぶれておらず、まるでそこに何かいるようだ。

「えつとね、いろんな子がいるんだけど……例えば、ここにいる子はね、」

自分の視線の先を指さして、恵美理ちゃんが言う。

そこには、トンボのような薄い羽を持った小さな小さな女の子がいるらしい。恵美理ちゃんが目を覚ますとその子が顔の上を飛んでいて、ひたすら「動くことを禁じます」と呟いていたらしい。なにそれホラー！

「で、ほんとに動けなかったもんだから、冗談じゃないーっておもって、『動くわよ！』って叫んだら、動けるようになってたの」

だから、昨日の連中のせいじゃなくて、この子のせいだと思ってたわ。と、恵美理ちゃんは言う。

「そもそも、いたの？あの人たち」

起きた時にはもういなかったらしい。あの杖を突く音で目を覚まसानかったなんて。床越しに響いてきて、起きてからもうるさくしてようがなかったあの音の中で寝ていられたなんて。

「大物だね、恵美理ちゃん」

昨日の泣いていた姿からは想像つかない。いや、よく考えてみれば立ち直るのは早かった。

「いましたよ。なんか、三回くらい同じことやって、誰か現れて、連れていかれました」

白兔くんが言う。あれ、三回？私は二回しか見ていないのだが。

……人のことは言えないらしい。

「私は昨日、あの連中の中の一人になんか術をかけられて体が動かなくなってたの」

「え？でもあたしたちに駆け寄ってきてくれましたよね？」

「帰り際に術を解いてったからね」

「なるほど」

白兎くんが頷いて、あれ、と首をかしげた。

「なんで、今回は解除していなかったのでしょうか？」

「そうね」

恵美理ちゃんも首をかしげる。

私は、昨日自分が言ったことを思い出す。

『私たちって失敗で出てきた不用品扱いみたい』

つまり、そういうことではないだろうか。

ストール集団は、勇者様さえ呼べればそれでよかったのだろう。

不用品には、注意力散漫になっていたのだろう。

もしくは、初めから解除する気がなかったか。イレブンが昨日術を解いたのはただの気まぐれであつたかもしれない。

つまり、本当にストール集団は私たちを人と思っておらず、全く

用のないものイコール不用品として、私たちは、

「……放置されたね……………」

少しの間、静かになった。

「ふざけんな、って感じだわ！」

私が言葉にしなかった事柄まで理解してくれたのだろう、恵美理ちゃんがそのきれいな青を吊り上げて激昂する。

「どうすればいいのでしょうか……」

白兎くんが一続きの壁を見渡して、次いで途切れた螺旋階段を見上げて、呟く。

私も途方に暮れて、溜息を吐く。

食料はある。飲料もある。しかし、その量は限られている。

体を動かせたところでここから出られないのでは、いずれは餓死するしかないだろう。

いや、今は三人とも体を動かせる。考えたくはないが、極限状態にあつて、本能だけで行動するようなことになれば、三人のうち二人もしくは全員、餓死以外の死に方をするかもしれない。

暗い未来を想像し、私の気分はひたすら落ち込んだ。

「とりあえず、ここを出てから、これからのことは考えればいいんじゃないかしら」

「え？」

落ち込んだ気分は、恵美理ちゃんの一言であっさり元の位置まで浮上した。

私と同じように落ち込んでいた白兔さんと共に、とても当たり前のことを言っているという顔をした恵美理ちゃんを見る。白兔くんは、ずい、と体の前に手をついて、前のめりになっている。

「え、え、なに？あたし、何かおかしいこと言っただ？」

「どうやって、ここから出るのですか？出られるのですか？」

目を白黒させて（青いけど）、恵美理ちゃんが言くと、矢継ぎ早に白兔くんの質問が飛んだ。

私も白兔くんの後ろで大きく頷く。

「ここから出るには、多分宙に浮けることが大前提なの。この部屋（？）に出口はあの上の方にある階段くらいしかないもの」

「え、だから、その階段まで行けばいいんでしょ？この子たちに頼めば何とかかりますよ」

恵美理ちゃんが何も無い空間をぐるりと見渡して、言う。

「ここに、さっき私たちの動きを止めていた子たちが六人いるんです。この子たちがさっきから『上に連れて行ってあげる』って言うてるから、階段まで行けるみたいです」

私たちには見えないお友達が手伝ってくれるらしい。ありがたい。こんなファンタジーな状況をすでに受け入れている恵美理ちゃんの

適応力に脱帽だ。もしかして私みたいに元の場所に規格外な知り合いでもいたんだろうか。それとも恵美理ちゃんはもともと規格外だったのだろうか。

「――？」

言葉の出てこない私たちから視線をずらし、恵美理ちゃんは自分の斜め下を向いて何やら話し始める。

元の場所で見たら、美少女な電波ちゃんである。この状況では、たった一つの希望の光だ。

「――。――！」

頷きながら、恵美理ちゃんが強い口調で何か言つと、急に白兔くんが宙に浮いた。

「うええ！？」

上ずった驚きの声をあげる白兔くん、恵美理ちゃんぐ、と親指を示して言う。

「一人ずつしか上に連れていけないんだって。まずは、白兔ね」

恵美理ちゃんはきらめく笑顔だが、急に宙に浮いた白兔くんは青い顔で口をパクパクさせている。

そして、そのまま白兔くんは吸い込まれるように上に昇って行った。ストール集団はゆっくりとあがっていった印象だったが、正しく吸い込まれていくようなスピードで、螺旋階段の中心へと、みるみる内に白兔くんの姿は小さくなっていった。その光景に、私の顔も青くなっていたことだろう。

「あれ？螺旋階段もすっ飛ばして行っちゃった……」
上を見上げて恵美理ちゃんがポツリと呟く。

「ま、いいか。次は、千草さんね。すぐに戻ってきてくれるらしいから」

こちらを向いた恵美理ちゃんに、私はびくつとしてしまった。

「あ、戻ってきた。じゃ、千草さん、いつてらっしゃい。――」

――」

体が浮く。ふわり、と重力が途切れたように。

しかし、重力は途切れていなかった。

（うえええええええ……！高速エレベータあああ）

急に上昇を始めた体は風を切り、どんどん螺旋階段へと近づく。

昇りのエレベーターを高速にしたような感じだろうか、空っぽの胃袋をシェイクされているような、頭の血がどんどん下に降りていくような感覚だ。

視界を螺旋階段と思わしきものが視界を流れていく。

そして、高速エレベーターは唐突に止まった。

「おうえっ」

胃袋が空でよかったと思ったのは、初めてかもしれない。

急停止は一瞬無重力になったかと思わせた。下に引っ張られていた胃袋が唐突に浮き上がるような感覚に、一瞬ものすごい吐き気を感じたが、胃袋が空なので、何も出てこなかった。よかった。本当に良かった。

止まって、私の足がついた場所は螺旋階段の終わりで、閉じている両開きの扉と、その前に四畳分くらいのスペースがあった。

「あ、千草、さん。大丈夫、です、か」

そのスペースにうずくまっていた白兔くんが顔をあげて、私を見る。顔色が真っ青だ。私も同じように真っ青だろう。

「うん、なんとか、ね。白兔くんこそ大丈夫？顔色ひどいけど……」

「僕、ジェットコースターは平気なのですが、フリーフォールのような垂直運動、苦手なんです……」

若干紫色を帯びた唇を震わせ、黒曜石の瞳を潤ませて、白兔くんが呟く。

「ああ……」

何となく何が言いたいのかわかって、私は適当な相槌のようなものを吐き出し、つい遠い目になってしまった。

そこに、恵美理ちゃんと、彼女と白兔くんの荷物が上ってきた。

「お待たせ。なんか、荷物が重かったらしくて、ゆっくりになっちゃった。って、あれ。白兔、あんたどうしたの、顔色悪いわよ」

どさ、っと荷物が降りて、次いで恵美理ちゃんがスペースに降りた。

「いえ、なんでもありません。荷物、ありがとうございます」

青い顔で弱弱しいながらも笑みを浮かべ、お礼を言う白兔くんの大人な態度に、つつい私の目に涙が浮かびかけた。

「何でもないの？ならいいけど。じゃ、ここから出ましょ」

恵美理ちゃんは不思議そうに白兔くんを見た後、閉まっている扉の取っ手に手をかけて、引いた。が、開かない。

「あら？」

「鍵がかかっているの？」

押したり、また引いたりする恵美理ちゃんに、聞く。

「そうなのかも。って、ん？」

私に頷きかけた恵美理ちゃんは、自分の肩の方を見て、誰かの言葉を聞いているような動作をする。私たちには見えない子たちが何か言っているのだろう。

「——？——！あ、開いたー。よし、出ましょ」

恵美理ちゃんが勇者様^{チート}に見える……。

私は恵美理ちゃんの後について扉を抜けた。

扉の向こうには、薄暗い石造りの回廊があった。恵美理ちゃんはその曲がりくねった道を、迷わず進んでいく。

「すごいね、恵美理ちゃん。私たちに見えない子たちが案内してるの？」

「うん、あ、じゃなくて、はい。この子たち、すごい物知りみたいなんです。何でも聞いてくれて」

「へえ。ね、もしかして、敬語苦手なんじゃない？無理しなくてもいいよ？」

「あ、ほんと？よかった。うん、実は敬語苦手なの。普通でいいなら、助かる」

恵美理ちゃんがこちらを見て、笑う。何となく、初対面らしい白

兎くんを早々に呼び捨てしているところから、苦手なのではないか
と思ったのだが、当たっていたらしい。年下のいここには呼び捨て
もされているので、恵美理ちゃんに「年上には敬語でしょう」なん
て言うつもりもない。

にここにこととしていたら、私の後ろに視線をやった恵美理ちゃんが
「あれ？」と声をあげた。

「白兎？どうしたの？」

後ろを振り返ると、白兎くんがついてきていない。少し遠い位置
で立ち止まり、何か考えているのか、顎に手をやって俯いている。

「あ、すみません。ちよつと考えごとをしていました」
ててて、と駆け足で寄ってくる白兎くんを立ち止まって待つ。

「考え事？なに？」

私が尋ねる。

「その、さつきから気になっていることがあるのです」

「気になっていること？」

恵美理ちゃんが首をかしげる。

気になっていることなら、私にもある。恵美理ちゃんが誰と話し
ているのか。見えない人がそこにいると言われても、言えない者は
見えないのだから、不思議に思っても仕方がないだろう。

しかし、白兎くんの気になるところは別のことだった。

「あの人たち、英語を話していましたよね？」

あの人たち、と言うのは、十中八九例のスクール集団のことであ
ろう。たしかに、あの連中が話しているのは英語だった。もしここ
が、そうだとはい底思えないのだが、地球上のどこかだとすれば、
英語圏に私たちは召喚されたことになる。

「そうだね。英語だったね」

「何を言っているのかは聞き取れなかったのですが……」

白兔くんが申し訳なさそうに俯く。それは仕方がないと思う。なにしろ、白兔くんはまだ中学三年生だ。私は英文科というひたすら英語の勉強ばかりする学科に在籍しているから、なんとかストール集團の会話を追うことはできたが、今の段階で白兔くんにそのレベルを要求するのはおかしいだろう。

「そうね、全く聞き取れなかったわ」

恵美理ちゃんも言う。待って、恵美理ちゃん。君が全く聞き取れないのは少し問題ではなからうか。自分の高校三年生のことを思い返せば、センター試験のためのリスニング演習の思い出が蘇る。いくら理系でも少しくらいは英語が受験に関わってくるはずだと、英語教師の担任が力説していた。

「えっと、大したことは言ってなかったけど、どうも、ユウシャサマを召喚するためだったっぽいよ？あの儀式」

とりあえず、人のことを「これ」呼ばわりしていたことは省いて、簡単に説明する。知っても気分が悪くなるだけだろう。

「千草さん、英語できるのね。すごいわ！」

恵美理ちゃんが感嘆の声をあげる。白兔くんもすごい、と言ってくれた。英文科でよかった、と、しみじみ思う。

「じゃあ、やっぱりここは、普通の会話は英語で行われているんですね」

白兔くんが頷きながら言う。

私は『普通の会話は』と言う部分を白兔くんが強調したように思ったので、目で次の言葉を促した。

「恵美理さん、フランス語を話されていますよね？さっきからその、見えない方々とお話するとき」

あの人たちも、儀式をしている時や、浮かんだ時、フランス語を話していました。と、彼は言った。

9. (後書き)

今までに投稿していた話の、英語で話されている部分の「」を『』に改めました。

「え、うん。そうよ？」

恵美理ちゃんはあっさりと肯定する。

私はそれを聞いて、右こぶしで左の掌を叩いた。そうだ、フランス語だ。自分が大学で第二外国語として選択している言語だから、どこか聞き覚えがあったのだ、と納得する。ちなみに、昨年度の私のフランス語の成績は、可だ。すべての授業に出席し、テスト前日まで単語を暗記しまくって、なんとかその成績をとった。現在の会話レベルは「あなたは歯医者に行きましたか？」「はい、私は歯医者に行きました」だ。すぐにわからなくても無理はないと思っしてほしい。

「やつぱり。なんだか聞き覚えがある気がしたんです」

白兔くんが頷きながら、言う。中学校三年生がフランス語に聞き覚えがあるって、なんで？と思ったが、その疑問はすぐに解消された。

「なに、白兔。あんたもフランス語話せるの？」

私と同じ疑問を持ったらしい恵美理ちゃんが問う。

「いえ、僕はフランス語は話せません。でも、ドイツにいたところ何度かフランスにも行ったことがあるので、音が耳に残っていたんです」

少し得意げな微笑みがとても可愛らしい白兔くん。しかし、「ドイツにいたところ」ってなんだ。

「白兔くんは、ドイツにいたことがあるの？」

「はい。小学校卒業まで、ドイツに住んでいました」

帰国子女か。

「ふーん。じゃあ、あんたドイツ語は話せるってことね」

「はい。ここ二年半くらい使っていないので、怪しくなっているかもしれませんが……で、気になっていることなのですが、もしかしてここでは、フランス語を話せる、というのは、魔法を使える、と同義なのではないでしょうか？」

一つずつ区切るように、白兔くんは言葉を紡ぐ。

「僕たちの体を押さえていた金縛りを解いたり、宙に浮かぶ術が、恵美理さんの話すフランス語で行われているのだとしたら、僕たちをここに呼んだ、あの人たちの術も、恵美理さんは使えるのでは？」

その言葉に、私は「あつ」と、声をあげた。

「そっか、そういうこと！白兔くん鋭い！」

「え、どういうこと？」

恵美理ちゃんは首をかしげている。

「つまり、その、僕らには見えない方々をお願いして、元の場所に戻していただくことはできませんか？」

あのストール集団の怪しい術は、フランス語だった。つまり、今恵美理ちゃんがしているように、私たちの目には見えない存在にフランス語で語りかけることによって術を行っていたのだろう。

ならば、召喚の儀式も白兔くんが言うにはフランス語だったらしいので、恵美理ちゃんにも可能なのではないかと思われる。そして、召喚の儀式が可能なら、逆も可能なのではないか。

送還の術もあるのではないか、と言うのが、私たちの考えだった。

「あ、なるほど、ちょっと待ってて。――？――。」

「？」

恵美理ちゃんが虚空に向かって話し始める。私と白兎くんは固唾を飲んでそれを見守った。

「！——！！——」

やがて、恵美理ちゃんの眉が下がり、こちらを見た。

「ごめん。無理だつて」

恵美理ちゃんがしゅん、と落ち込んで話してくれたことには、周りにいる子たちはあの儀式で、人を引く張る役割しか無いらしく、ストール集団（恵美理ちゃんが言うには、神殿の魔法使いたちらしい）が勇者の指名をし、それを『光の女神さま』が世界と世界の間に連れてきていたのを引く張っていたのだという。

「だから、新しく呼ぶことも難しいけど、元の場所に戻すのは不可能だつて……」

恵美理ちゃんはくしゃり、と顔を歪めた。泣きそつだ。

私たちは慌てて、恵美理ちゃんを慰めにかかった。

そもそも、あの部屋から出ただけでもものすごく助かっているのだし、この場合悪いのは勝手に人のことを呼び出すだけ呼び出して置いて放置していったストール集団たちであって、帰れないことに恵美理ちゃんが責任を感じる必要はどこにもなく、むしろ、こちらが勝手に期待をして、それを背負わせてしまっただけなんじゃない。三人でこれから頑張ろう、ということをして二人がかりで主張し、なんとか恵美理ちゃんをなだめた。

今度は白兔くんが涙目になっているが、これは私にはどうしようもない。

だって、私だって同じことを思ったのだ。

ここで白兔くんを私が慰めるとすれば、その方法は「私も同じことを考えていた」ということを伝えるということで、それはまた恵美理ちゃんに私たちの期待を背負わせて、苦しめることになってしまうだろう。

どちらにせよ、年下の子たちの心に傷を負わせてしまっているこの状況が、私の心にも痛い。ごめんよう……

私がただ、白兔くんの目に涙がたまのを見ていると、横から出てきた手が白兔くんの頭をはたいた。

「なんであんなに泣きそうになんのよ。この場合の被害者はあたしでしょ」

恵美理ちゃんが左手をぶらぶらと振りながら胸を張る。私は思わず口を開けて恵美理ちゃんを見つめてしまった。

「……すみません」
ふるふると震える白兔くん。恵美理ちゃんがまた、彼の頭をはたいた。

「だーからあー泣くのはあたしなのっ！あんなに泣くんじゃない

の！」

「がああ、と吠えるように恵美理ちゃん言う。

「いい！？あんたが泣いたら、あたしも泣くから！あたしを泣かせたいなら、そのまま自己嫌悪で落ち込んで、好きなだけ泣きなさいよ！！」

「……」

白兔くんが目をぱちぱちさせて恵美理ちゃんを見る。瞬きの拍子に、ぽろり、と一粒の涙が落ちたが、それ以降は止まった。

恵美理ちゃんはまるで、白兔くんに勝負を挑むかのように睨みを利かせている。

「で？泣くの？泣かないの？」

「……泣きません」

白兔くんが答え、恵美理ちゃんは満足そうに微笑んだ。

（……あれー？年長者として、これはどうなんだー？）

心の中で声がするが、聞こえないふり。二人が立ち直ってくれてよかった、よかった。

・
・
・

「じゃ、とりあえず、神殿から出ましょ」

恵美理ちゃんがかかるり、と進んでいた方向を向き、歩きはじめる。私はその背を追いながら、恵美理ちゃんに気になった単語を返す。
「神殿？」

「そ、神殿。なんか、光の女神さまを祀ってるところらしいわ」

「女神さま、ですか？」

「うん、ここでは、光の女神さまを信仰してるみたい」

「ね、さっきも女神さまって言ってたよね。こちらに連れてくるとかなんとか……」

少し小走りに、恵美理ちゃんの横に並ぶ。

「うん。そう言ってた。でも、それ以上はちょっとわからないの。

この子たち『光の女神さまは、光の女神さま』としか言わないから……」

「女神さま、ねえ…… ユウシャサマを呼んだのは、それ、ってことかな？」

恵美理ちゃんの隣を歩きながら言うと、反対側に並んだ白兎くんが同意した。

「多分、そうですね。恵美理さん、目に見えない方々は『世界と世界の間』に『女神さまが連れてきた』人を引っ張っていたんですよね？」

「うん、そう言ってる」

白兎くんの言葉を恵美理ちゃんが肯定する。

「あのさ、じゃあ、私たちは？」

多分、白兎くんと同じことを考えていると思ったので、私は続きを言葉にした。

「私たちも、光の女神さまとやらに連れてこられたってこと？」

回廊を抜けると、そこは草花のかおる、野原でした。

私たちを連れてきたのが光の女神さまかどうか、という問いの答えは、「よくわからない」だった。恵美理ちゃんに聞いてもらったところによると、私たちは「女神さまに連れてこられたわけじゃないけど、ある意味女神さまが連れてきたようなもの」という存在らしい。わけわからん。とりあえず、今考えてもわからない問題は後に回すことにして、私たちは先を急いだ。まずは、「ここ」がどんな場所であるのかを知ることが重要だと思ったのだ。

そして、一番初めの言葉になる。

いくつもの角を曲がり、いくつかの隠し扉を潜り抜け、二度ほど隠し階段を下りて、上って。そうしてたどり着いた扉を、再び恵美理ちゃんがフランス語を唱えて開き、目の前に広がった光景が、これ。

「へ？神殿、は？」

思わず、間抜けな声を出してしまっても、仕方がないのではないだろうか。

後ろには、石造りの直方体の、回廊の最後の部分が、まるで地下道の入り口のように建っている。いや、実際今とおってきた道は地下道だったんだろうけど。それ以外、ざっと見える範囲に建築物は見えない。

野原の周囲を木々が囲み、ここは、森林の真ん中にぽつんとある空間なのだろうと思われる。

「――？――merci beaucoup！ 神殿には、兵隊がいるから、神殿の外に繋がるところに案内してくれたみたい」

何か話していた恵美理ちゃんが教えてくれる。最後の「めるし、ばくー！」はわかった！「Thank you very much」、「ありがとう」だ。

なるほど、私たちは結構危ないところをうろろしていたらしい。神殿の人間だというストール集団の対応のことを思うと、私たちが客として扱われることは望み薄だったろう。

「要人の、避難時用脱出通路、でしょうか」

「そうだね。隠し扉とか抜けてきたし、多分そういう通路だったんだろうねー」

三人でとりあえず、と扉のあった反対側の壁の前に座り、恵美理ちゃんの持っていたお菓子と白兎くんの水筒のお茶で休憩しながら話をする。

「蝋燭とか、そういう照明具のようなものはなかったのに、明るかったですね」

白兎くんが言う。そういえば、何もないのに、視界は良好だった。ああ、あれ？あれもこの子みたいな子たちが光ってわよ？」

恵美理ちゃんがチョコレート菓子の袋を開けながら言う。

「へー。結構万能なんだねえ。あ、ありがとう」

差し出されたチョコを受け取りながら、感想を述べた。

「どーぞ。ファミリーパックだからいっぱいあるし、三つずつくらい食べちゃいましょ」

恵美理ちゃんはがさがさと袋を鳴らしながら一人一人の前にチョコレートを置く。

「あ、ありがとうございます。恵美理さんもその、見えない方々に明かりになっていただくことができるんですか？」

もしよもしよと包みを開きながら、白兔くんが聞くと、恵美理ちゃんは「うん」と頷いた。

「なんか、この子たちが見える人って、ほとんどいないらしくて。会話ができる人はもつと珍しいらしいの。だから私と話せるのがうれしいみたい。なんでも言って言って言ってるから、この子たちにできることなら、頼めば何でもやってくれるみたいよ」

「はー」

「すごいです……」

ほんと、すごい。さすがだよ恵美理ちゃん。それは特別だ。^{チート}いや、彼女が努力もしくは成長の過程で習得した語学能力込みだから、狡^チつことは言わないのだろうか。しかし、私たちには見えない、妖精さんの何かが見えているようだし……ん？妖精さん？

「あ、ねえ恵美理ちゃん、もしかして、恵美理ちゃんの周りにいるっていう見えない子たちって、ファンタジーで言う妖精さん？」

私が思いついたことを尋ねてみると、恵美理ちゃんは首をひねった。

「んー。妖精さん、って言うと、ちょっとニュアンスが違うかも。確かに『妖精！』って感じのはつきりした子もいるんだけど、ほとんどの子がぼんやりとしてて、『妖精の幽霊』みたいな……」

「……精霊？」

妖『精』の幽『霊』で、精霊。何とも安直だが、私はその安直な連想を言葉にした。

「そう、それ！多分、精霊だわっ」

我が意を得たり！といった風に、恵美理ちゃんの目が輝いた。そうか、精霊さんか。じゃあ、さしずめ恵美理ちゃんの職業は精霊使^{ジョブ}

い、精霊術師といったところだろうか。

「では、これから、どうしましょう?」

一人三つのチョコレートを食べ終わり、のどを潤す程度にお茶を飲み、一息ついたところで白兔くんが切り出した。それを受けて、私は言う。

「恵美理ちゃんに、またお願いできるかな。精霊さんに聞いてほしいことがあるの」

「なあに?」

「人間の暮らすところまで、案内してもらえない?」

ここがどんなところであるか、元の場所に帰る方法があるか、ここに滞在しなくてはいけないことになったとして、私たちは生きていけるのか、いろいろと知るべきことがある。

精霊さんたちが帰るすべを知らないのであれば、人に聞くしかあるまい。

13。

そして、恵美理ちゃんに精霊さんへの質問を頼んだ結果、私たちは草花摘みをしています。

なぜこうなったか。

それは、しばらく精霊さんと話していた恵美理ちゃんが会話を終えて私たちの方を向き「ちよつとここでお花摘んでいった方がいいって言うてる」と言ったからだ。

どこの赤い頭巾の女の子ナンパする狼さんだ、と思ったが、花摘みには理由があった。

「人間の町に行くなら換金できるものを持って行った方がいい、つて、人間の生活を熟知してるね、精霊さん……」

精霊さんが、町でお金に変えられる草を教えてくださいたらしいのだ。「多分、精霊さんは人間の生活に根付いておられるのでしょうか。」さっきの廊下の明かりと言い……」

ぶち、と薄桃色の花びらの花を摘みながら白兔くんが微笑む。とても似合っている。一枚の絵になりそうな光景である。

「そうねー。なんか、色々人間臭いところがあるのよねー。ちよつと口調がお母さんみたいなお子もいるし。あ、千草さん、その青い花もだつて」

「これ？」

「そう、それ」

せつせと恵美理ちゃんの指示通りに花や草を摘み、私が腰に巻いていたパーカーを地面に広げた上に、種別に束にしておいていく。

パーカーといえば、ここで、私たちの服装について説明しておこうと思う。

まず、恵美理ちゃん。前にも述べたことがあるが、セーラー服だ。アイボリーの夏用ブラウスで、セーラー襟には薄緑の細いラインが三本で、緑色のスカーフが胸元で揺れる。同じく緑色のプリーツスカートはひざ丈だが、足が長いので全然野暮ったく見えない。白のハイソックスと磨かれている黒のローファーで、見るからに育ちの良さなお嬢さんだ。

次に白兔くん。白のワイシャツに薄手の紺のカーディガン（合わせが左前だったので、ちゃんと男物だ）に色の濃いジーンズ、履いているのは白を基調に黒のラインの入ったスニーカーだ。とっても普通な、人によっては地味な格好なのだが、白兔くんが着るととても洗練されて見える。しかも、カジュアルなはずなのに、礼服としても通用しそうな気品がある。

そして、私。上、白いＴシャツ。下、ストレッチ素材のストレートジーンズ。温度調節用に腰に秋物パーカーを巻いていた（今は外して風呂敷に）。部屋にいたので履いているのはルームシューズ。全て三年以上前に妙に丈夫な白い袋に赤いロゴの某全国チェーン衣料品店で購入したもので、よれよれだ。Ｔシャツなんて、中学一年生の時から着ているものだったりする。二人と並ぶと「スリッパじゃなくて、よかった」くらいしか言えない。ここまで服装について、恵美理ちゃんのセーラー服以外に触れなかったのは自分のこの格好が理由である。ちなみに、今ずらずらと述べたのは、一気にすべて明かしておくことで流せないだろうか、という思惑だ。――

閑話休題

「よし、こんなもんかな。どう？恵美理ちゃん」
パーカーの上にこんもりと積まれた草花を、恵美理ちゃんに確認してもらおう。

「うん、これくらいあればそこそこなお金になるって。じゃ、行き

ましょ」

「はいよ。じゃ、これは私が持つね」

くるりと巻いて、袖の部分を結び、持ち上げる。やっと私にも荷物が、と少し感動した。

地面においていた荷物を二人とも拾い、肩にかける。

恵美理ちゃんが野原を突っ切って森へ進み、私たちはそのあとをついて歩いて行った。

そして私は、昨日の自分が、夏用のスリッパから秋・冬用のルームシューズに履き替えていたことに、心の底から感謝したのだった。森の中は、歩きにくかった。

あちらこちらに露出している木の根、重なった枯れ葉で見えない窪み、水たまり、ぬかるみ、苔。スリッパだったら、初めの一步で顔から地面に突っ込んでいただろう。

両手でこれからの軍資金になる大切な荷物を持っているのに、何度もスッ転びそうになる私を見かねて、恵美理ちゃんが精霊さんに頼んで、全員浮かばせてくれた。楽ちんである。……申し訳ないとは思っています。

ふわふわとリアル空気椅子状態で浮きながら、私たちは森の中を移動する。恵美理ちゃんは「どうせだったらスピード出そうか？あ、空飛んでいく？」と言ってくれたが、私たちは丁重にお断りした。ジェットコースターは嫌いじゃないが、終わりのわからないそれは遠慮したい。

恵美理ちゃん是不満げだったが、短い話し合いの結果、駆け足くらいの速度で森の中を低空飛行、という移動方法に落ち着いたのだった。

「すごい、空気がおいしいですね」

ほう、と息をついて白兔くんが言う。

樹齡はいつたい何百年だろうか、と思わせる堂々とした大樹が上へ、上へと伸び、重なり合った枝々の葉の間から零れ落ちる光は薄く緑に色づいて、それが溶けたかのようなすがすがしい空気が穏やかに吹く風に流れている。

「そうだねえ。気持ちいいね」

大きく呼吸をして、空気を味わってみる。少しカビのような匂いがするが、それもまた、森という自然の内。

体内の悪いものが吐く息とともに排出されていくような心地がある。

「ちょっと眠りたくなるわよねー。昨日はあんな硬い床だったから、口々に寝られなかったし」

恵美理ちゃんが言う。ダウトだ。あの儀式の中でも寝続けたいた人が何を言うか。と思ったが、白兔くんの言葉から推測するに、私も一回目の儀式には気付かず寝ていたらしいので、人のことは言えない。言わない。

「そういえば、昨日は見えなかったんですか？」

白兎くんが何かを思い出したように、問うた。

「何が？」

恵美理ちゃんが問いを返す。

「精霊さんです。昨日、恵美理さんは精霊さんたちとお話していませんでしたよね」

白兎くんの言葉に、私と恵美理ちゃんは揃って「あ」と声をあげた。

そういえば、恵美理ちゃんがなにやら私には見えない存在と話し始めたのは今朝になってからだった。

「そうね、昨日は、見えていなかったかも……」

恵美理ちゃんが首をひねりながら言う。記憶を遡っているのかもしれない。

「うん、昨日は周りにこの子たち、見た覚えはないわ」

きつぱりと恵美理ちゃんが断言した。

「そうですか」

「昨日はいなかったってことかな。それとも、今朝急に見えるようになった？」

私が聞くと、恵美理ちゃんが答える。

「多分、今朝見えるようになったんだと思うわ。この子たち、どこにでもいるみたいだから、昨日のあの場所にもいたはずだもの」

「では、恵美理さんにあの人たちの術がかけられたことが原因なのでしょうかな？」

白兎くんが顎に手をやって考えている。どうやら、顎に手をやるのが考えるときの癖のようだ。

「その線が一番可能性たかいよね。でも、それだと、同じく術をか

けられてた私たちには精霊さんが見えるようになってないんだろ？
やっぱフランス語が話せないとだめなのかな」

フランス語が話せることが条件だとすれば、それは「歯医者に行きました」レベルではなく、もっと実践的なものが話せることが求められているのだろう。

「そうかもしれませんがね」

私の言葉に、白兔くんが頷く。

「うん、この子たちと会話できる人、いないも同然らしいから、フランス語が話せるっていうのは、ここでは特別なのかも。あたし、ラッキーねっ」

きらきらと恵美理ちゃんが笑う。確かに君のオーラは特別選ばれし者って感じだ。

「私たちもラッキーだよね、白兔くん」

私が言うと、白兔くんは勢いよく同意した。

「はい！こんな状況で偶然、恵美理さんと一緒に出来たのは、本当に運が良かったです！」

そして、二人で異口同音に「ありがとう」と言うと、恵美理ちゃんは「やめてよ、照れるじゃない」と少し頬を赤くした。いやいや、お礼は言わせてください。

だって、恵美理ちゃんは本当の本当に、紛うことなく私たちの救世主さんなのだから。

感謝の気持ちを偽りなく、余すことなく伝えようとがんばったら、恵美理ちゃんは真っ赤になった。

かわいいなあ、とほのぼのしたのは束の間、恵美理ちゃんが何やら叫んで、私たちの移動速度が加速した。

「うやあああああああ！！」

「はうええええええええええ！？」

私たちの声は、森に木霊したかもしれない。地面と平行な驀進に、周りの音なんて聞いている余裕はなかったのだけれども。

「ここは……」

どれほどの間、平面ジェットコースター体験をしていたのだろうか、気付くと私たちは森の途切れた場所で、地に足をついて立っていた。いつ止まったのか、どうやって空気椅子状態から立ち上がったのか、全く記憶にない。どうせなら、平面ジェットコースターも記憶の彼方にやってしまいたいが、あの体験は脳にしっかりと刻まれてしまった。いまだに心臓がバクバク言っている。

「ここから、まっすぐ行つてすぐのところに、人間の町に通じる道があるらしいの。どうせだから、歩きましょう？」

にっこり笑顔で恵美理ちゃんが言う。後ろに何か見えた気がした。やったね、私にも精霊さんが見えた！冗談です。

私と白兔くんは無言でこくこくと頷き、恵美理ちゃんに続いて行

くことにした。

恵美理ちゃんは照れ屋さんのようだ。心のメモに記しておかねば。「許容範囲を超えた場合の、照れ隠しが凶悪」、と。

人の住む場所に通じるという道は、本当にすぐ見つかった。背の低い木が疎らに立つ間を、少し背の高い草をかき分けながら歩いて五分もたたないうちに私たちは舗装はされていないが、地面がむき出しになり、平らに整えられた街道らしき道の斜め上にたどり着いていた。二メートルほどの斜面の下を通るそれを、私たちは腹ばいになって、草の間から覗いていた。

「どうしよう。これ」

「困ったわね」

「出ていけませんね」

道行く人々やその他を見て、小声で口々に言う。

人々の服装は、私たちの来ている現代日本のものとずいぶん違っていた。男性は体のラインの出ないゆったりした服を腰に巻いた布で調節し、デザイン？なにそれ美味しいの？と言うような、シンブルなズボンの端を布製のように見えるブーツに入れている。白兔くんのような、スタイリッシュな細身のブラックジーンズ、なんて人はいない。

女性はほとんどがワンピースで、たまに上が男性と同じような服で、下がズボンではなくスカート、という人がいるが、結局皆スカートで、膝丈よりも長めで、少し膨らんでいる。恵美理ちゃんのように、きれいな足が主張している人は一人もいない。

また、荷物を背負わせた口バを引いていたり、馬車に乗っていたりで、自動車は勿論、自転車だって通らない。

途方に暮れる私たちの目の前を、がらがらと音を立てながらまたもう一台、馬車が通り過ぎた。

「とりあえず、ここ、地球じゃないと思うんだけど、どう思う？」
馬車を引く馬を見て、言う。

「そうね。今まで一番この状況を受け入れてるみたいだった千草さんが、まだ往生際悪くここが地球だって可能性を少しでも考えていたことにびっくりしてるわ」

恵美理ちゃんがさらに、と答える。あれ、そこ？

「い、今のって！ユニコーンですよー！？ああ、すごい！ああいうモノもいるんですね！！」

白兔くんに至っては、私の言葉を聞いていない。目をきらつきらせて、頬を紅潮させている。恋する乙女か。

しかし、ユニコーンか。そういう言い方があるのか。

灰色に黒ブチ模様のずんぐりとした体、額に灰色のつるんとした円錐型の角が一本。

これが、私がこの世界で一番初めにみた、幻想的（幻想的？……
幻想的？）な動物だった。

16。

『お前たち、何者だ!』

ユニコーン（仮）ってつけたい）を見た衝撃に遠くに飛んでいった私の意識を現実に取り戻したのは、唐突に背後に現れた人物の鋭い声だった。

振り向くと、刃物を向けられていた。

「ひっ、」

「え、これ、本物なのかしら？ すごい切れそうなんだけど」

「恵美理さん、突っ込みどころはそこでは無いですよ。この世界、銃刀法とか、ないみたいですわね」

「そこでもないんじゃないかしら？」

『なんだ!？どこの言葉で話しているっ！もしや、お前たち、魔の者か!』

悲鳴を上げようとしたら、思わず力の抜けるような、二人の会話が聞こえて、叫びそびれた。日本語がわからないらしい目の前の人物はもともと険しかった顔をさらに険しくして、片手で持っていた剣（両刃の、まっすぐな西洋風の剣）を両手で持ち直し、構える。

「ねえ、なんて言ってるの？」

「なんだか、怒っていらっしやるようですね」

二人に危機感はないらしい。恵美理ちゃんがいるから、当然かもしれないが。

『人の言葉を話せないのか！魔の者だなっ！』

剣を持った人物が突っ込んでくる。

恵美理ちゃんがただ一言、「ノン」と言う。

剣がはじかれ、宙を飛ぶ。そのまま人物の後方まで飛んでいくかと思いきや、真上で停止した。

みんなの視線が、突然の闖入者の頭上に注がれる。

「———？———！ M e r c i ！」

にっこりと笑んで、恵美理ちゃんが私に顔を向ける。あれ？なぜかさつき森の終わりで見たような気がするよ、その笑顔。後ろに何か漂ってる気がするのもおんなじだ。

「千草さん、この子たちのサービスだって。なんか変なことされそうになったら、ノン、って言ってね。落とすから」

何を落とすのか、気になるが、聞けない。聞いちゃいけない。

「じゃ、尋問、お願いね？」

「ヨロコンデー！」

ぎこちない笑顔で、棒読みで、返事をして、自分の頭上に切っ先を下にして浮かぶ剣を、冷や汗を流して見ている人を見る。

『わたしたち、マン オブ デヴィル ではありません。お話しませんか、ミスター』

（多分）この世界の公用語を話した私に視線を向けて、ミスター、つまり、男の人は焦ったように叫ぶ。

『言葉が通じるのか！じゃあ、人間だな！人間でなければこの言葉は話せないはずだから！オレはこの先の町の自警団の団員なんだ

！こういう術がつかえるってことは、精霊術師がいるんだな？悪い、誤解したんだ！分かったから、オレの上から剣をどけてくれ！』
ものすっごい取り乱している。

言葉が通じたら、人間なのか。では、この世界には、他の、人間の話す言葉が英語しかないのだろうか。それとも、世界公用語、とか言う感じで、母国語が他にあっても学んでいるのかなのだろうか。しかし、一度の台詞で、色々な情報を伝えてくるものだ。

「恵美理ちゃん、尋問、いらなかった」

私たちを「man of devil」つまりは「悪魔の人」、ちよつと私風に訳して「魔の者」っていうのと勘違いして攻撃してきた、自警団、つまりは警官さんのようなものらしい。

「でも、やって」

無茶なことを言いなさる。

「何の前触れもなく、しかも初対面の人間に刃物を向けるような人間、尋問で精神削られて真っ白に燃え尽きればいいんだわ」

まあ、その意見に反論はしないし、恵美理ちゃんがそう言うならば。

『その前にいくらかの質問をします。答えをください』

『何言ってるんだ！危ないだろ、さつさと……』

『答えてくれないなら、それ、落とします』

『さあ、何でも聞いてくれよ！』

HAHAHA！と、男の人が笑う。頬が引きつってるよ。

恵美理ちゃんの（や、何か聞いてたし、精霊さんの独断？）術効果てきめのである。

デモ、ナニヲオトスンダロウネー？

尋問と言っても、何を聞けばいいのだろう。

『まず、あなたの名前は何ですか』

尋問をしる、と言われても、何を聞けばいいのかわからないので、名前を聞いてみる。

つい、丁寧な感じになるが、別に相手に敬意を示しているわけではない。聞き取りはできても、話すときはどうしても教本のような話し方になってしまうのだ。

『……エリックだ』

『それは与え名ですよ？家族名はありますか？』

『なぜそこまで答える必要が……っ、家族名はピアスンだ。ピアスン・エリック』

家族名、ファミリーネーム、つまり、名字を尋ねると一瞬嫌がったが、自分の頭上にある剣を見て、渋るように、しかし、教えてくれた。本当かどうか確かめようもないので、というか、別にどうでもいいので、嘘の名前を言っている可能性もあるが、気にしない。ピアスン・エリックというらしいその人は、薄茶色の短髪で、目の色は緑の、体格のいい男性だ。どうやら、名字、名前の順に氏名は名乗るらしい。「ラストネーム」と言う単語を使わなかったのは、よかった。意味が通じないところだった。

『お前たちは誰だ！』

『答えません』

『んなっ！卑怯だぞ、オレは答えたのに！』

『あなたに質問の権利はありません。聞いているのはこちらです。この道の先に町があるのですね？』

エリックさんの問いに、別に答えてもいいような気がしたが、答えなかった。

尋問って、詳しくは何をすればいいのかわからないが、灰のようになれ、という恵美理ちゃん言葉から考えるに、ストレスで疲弊させればいいということではないか、と結論を出した。

『ぐ……そうだ。知らないのか？この道にいたというのに』

『ええ。それが何か。町の名前は？』

挑発するような口調になったエリックさんの言葉を軽く流す。何しろこの世界に来たばかりなのだ。何も知らないことに恥じなど感じない。

『レッドブリックだ』

少し悔しそうなエリックさん。

レッドブリック……どんな建物があるのか、わかった気がする。

『エリック、私たち、怪しいですか？』

『怪しい！』

即答だった。

『見慣れない服装の三人組が、街道の上から、明らかに隠れて人々を覗いているんだぞ！怪しいだろ！』

それは、怪しい。

『通報を受けて、盗賊かと思ってわざわざ町長の家のユニコーン車借りて目の前を通ったのに、何もしないし。だから、力の強い人間狙いの魔の者だと思ったんだ！』

ああ、やはりあれはユニコーンだったのか……。それにしても、つくづく、事細かに質問しなくても情報をペラペラ話してくれる人である。

「この人、エリックさんって言うらしいよ。なんか、盗賊か、マン

オブ デヴィルっていうのだと思われて襲われかけたみたい。で、この先には赤レンガの町があるって」

「ふーん？よくわかんないけど、あたしたち、怪しいのね？」

「みたいだね。てか、怪しいよね」

「むう……」

恵美理ちゃんに向かって、質問（なんか、尋問、とかそういう感じじゃなかったと思うから）への答えの内容の要約を伝える。自分たちが怪しいということに、恵美理ちゃんはどこか不満げだ。しかし、自覚はあるのだろう、それについて反論はない。

「危ない！」

白兔くんが叫び、話しに集中していた意識をそちらに向けようとしたとき、私の体に何かが衝突し、私は地面に倒れた。上に何かのしかかってきて、息が止まる。

「うぐっ」

「千草さん！」

肩に重みがかかり、首も動かせないが、何が起こったか、すぐに分かった。

ピアスン・エリックに押さえつけられてしまったのだ。

18。(前書き)

ちよつと暴力表現あり。

すぐに自分の状態に気付けるくらい、冷静だったのには、わけがある。

『隙だらけだな！これでこちらの……っ』

「――！」

『がつ』

何しろ、こちらには恵美理ちゃんがいるのだ。

エリック（「さん」なんてもう付けない）が勝ち誇ったのもつかの間、すぐに私の上から重みはどいた。

少し痛む腕に力を入れて起き上げれば、恵美理ちゃんと白兔くんが、投げ出されたらしく少し向こうで地面に転がっているエリックに近づいていくのが見えた。

「あんた、千草さんに何をしてくれてるのかしら。え？か弱い女の子に剣を向けるだけじゃ飽き足らず、襲いかかるって」

とてもいい姿勢のまま真下のエリックを見下ろしている恵美理ちゃんの、つやつやとした革靴がエリックの腹に乗り、ぎゅむ、とめり込む。女王様だあ……。一般的な踵の高さのはずなのに、ハイヒール、ピンヒール、その辺に見えるような気がする……。

「千草さんに攻撃、なんて、ふざけてますよねえ。どうしてやりましょうか。どうされたいですか？あ、言葉が通じないのでしたね。こちらで勝手に決めてしましましょうか」

エリックの顔のわきにしゃがんだ白兔くんが妖艶に微笑み、がつ、とエリックの顔を掴む。白魚のような手に、筋が浮かび上がる。ア、アイアンクローだあ……。細長い指の手は、思ったよりも大きいらしい。がっしりとエリックの顔をつかんでいる。

『あぐあっ』

エリックの悲鳴が上がる。

「そうね、精霊たちに頼んで、どこかに沈めてもらいましょうか」
大輪の薔薇のような華やかな笑みで、恵美理ちゃんが言う。それに、白兔くんが良いですね、なんて頷く。

『が……』

エリックの顔色が紙のように白くなり、青くなり、体がぴくぴくと痙攣しているのを見て、呆然としていた私ははっとして、二人を止めた。

「す、すとおつぷうつう！二人が私のために怒ってくれるのはとっても、とっても嬉しいけど、その人死んじゃう！まだ色々聞きたいこともあるでしょ！」

私の言葉に、渋々というように白兔くんは手を放した。ひゅう、とエリックが息を吸い、涙目で自分の顔をつかんでいた白兔くんを睨むが、白兔くんは涼しい顔をしている。おお……顔にくっきり指の跡が残っているよ。

しかし、恵美理ちゃんは力は抜いたようだが、足をどけない。

「え、恵美理ちゃん？足……」

「千草さんってば、優しいのね。でも、こいつはもつと罰を受けるべきだと思うのよね。ね、白兔？」

にーっこりと、笑みを崩さず彼女は言う。

「そうですね。僕も恵美理さんに賛成です、でも、千草さんが良いと言っておられますから、今は勘弁してさしあげましょう？……また何かあったら、頭蓋骨を粉碎してやりましょう」

答える白兔くんも笑顔のまま。頭蓋骨粉碎って……ああ、でもあれだけの荷物を持てる白兔くんなら、できるのかもしれない。できてほしくないけど。

なんだろう、二人の周りに和洋入り混じった花々が咲き乱れてい

るように見えるのに、怖い。花々の間から何かが滲み出てきている……。

「そうね。千草さん、こいつに、次ふざけたことしたら、あんたの剣で腹に穴開けて頭蓋骨粉碎する、って伝えてくれる？」

なにそれ怖い。

てか、そんな脅し文句、教本には載ってなかったよ。
どうやって英訳しよう……。

『えーっと、次にあなたがこちらを攻撃したら、あなたの剣があなたのお腹に穴をつくって、で、んーと……あ、そうだ、あなたの頭を彼が掴んで、クラッシュ！』

英訳、頑張ったよ！

こういう、アドリブなどときには頭に単語が浮かんでこないの、頭蓋骨、とかは無理だった。

しかし、クラッシュの時にパーからグーへと拳を握ったのもよかったのか、言いたいことは伝わったらしい。こちらを向いたエリックの、白兔くんの顔を見て赤みを取り戻していた（おいおい、と言いたい。その子、男の子ですよー）顔色が再び青くなり、こくこくと頷いた。それを見て、脅しが伝わったことを確認したらしい恵美理ちゃんが、おなかに乗せていた足を退ける。

『ぐうあっ』

……一度、片足に（多分）全体重をかけてから。怖いわあー。

『く、まさか、精霊術師があの子じゃなかったとは……』

ごろり、とうつぶせになり、腹を押さえながら、エリックが呟く。あの女、とは、私のことだろうか。

（ええっ。呪文（フランス語だけ）言ってたの恵美理ちゃんですよ。明らかに彼女が術使ってる人じゃない！）

『私？何故そう思ったのですか』

『落とす』と、お前が言ったから、お前が術師だとばかり……っ』

私は、日本語と英語しか話していない。あんなに発音の違う日本語とフランス語が同じに聞こえたとしてもいつのだろうか？よくわからないが、間抜けな人である。

私は、いまだ立ち上がれないらしいエリックに、少し離れたまま、質問を再開する。二人は地面に転がる彼の左右に立っている。多分、エリックがまた何かしようと思っても、何もできないうちに二人によって沈められるだろう。

『では、もう一度質問始めます。エリック、私たちの服装は変ですか』

『変だ』

答えるのが、とても早く、簡潔だ。少しむかつく。

『そうですか。この服で町に入ったら、目立ちますか？』

『絶対目立つだろうな』

ただでさえ目立つ容姿の二人だ。エリックの先ほどの警戒を思うと、服装で目立つのは避けたい。

『服を買わなくてはいいけませんね。私たち、草を売りたいのです。売れますか』

『草？薬草か？こんな怪しい集団から買う人間など、いないだろうよ』

鼻で笑うエリック。立ち直り早いな。いや、まだ地面に転がっているから、体勢的には立ち直ってないけど。

『なに、こいつ。今、鼻で笑ったわよね？』

恵美理ちゃんが足を持ち上げ、それを見たエリックが慌てて叫ぶ。『待て！よし、わかった！オレの乗ってきたユニコーン車に乗せて町に連れて行ってやろう！服もやる！ついでに、商人ギルドに連れて行って保証人にもなってやるぞっ！』

よくはわからないが、多分、大飯振る舞いなのだろうと思う。

『何叫んでんの？』

しかし、恵美理ちゃんには英語が通じない。

上げられた右足が下ろされそうになるのを、私が止める。

「恵美理ちゃん、ストップ！多分、今いろんな問題が一気に解決した！」

折角の渡りに船な話である。船を壊されては困る。

「ここで考えてても、服が手に入るわけもないし、エリックの話に乗ってみようと思うの」

恵美理ちゃんたちに、エリックが示した条件の話をし、ついに行こうと提案する。

二人は頷きながら聞いていたが、私の話が終わると首肯し、同意してくれた。

「そうね、最悪、こいつが裏切っても、この子たちいるし、何とかできると思うわ」

恵美理ちゃんが安全も保障してくれる。ありがたい。

『じゃ、エリック、ユニコーン車まで連れて行ってください。変なことしたら、クラッシュです』

白兎くんは右腕を掴まれたエリックに言う。小柄で華奢な白兎くんが、体格のいいエリックの腕にぶら下がっているようにも見えかねないけど、もちろんそんなことはない。

私の『クラッシュ』という言葉に、エリックは、白兎くんを掴まれた右腕を固まらせた。

・
・
・

『エリック、私たちを騙すつもりは、ないですよね？』

私は静かに、呟くように問い、白兎くんは右腕を掴む手に力を入れているらしく、エリックの袖にしができ、恵美理ちゃんは無表情に彼を見て、息を吸う。

『あ、当たり前だろう！』

エリックは青い顔で答える。

ユニコーン車、つまり、馬車のユニコーンが引くバージョンというのは、やはり私に衝撃を与えた灰色に黒ブチのユニコーン（仮）ではないことが確定してしまった）の引いているものだった。私たちのいたところから、然程離れていないところに止められていたそのそばには、もう一人、人影があつた。ユニコーンの手綱を持ち、辺りを見回している、長い髪を低い位置でひとくくりにした人物がこちらを見る。

『エリック！帰ってきたか。どうだった……って、なんだ？そのおかしな格好の子供らは？』

私まで子供の枠に入れられた。まあ、相手は欧米人風のお顔だ。ばりばり平凡な日本人顔の私は、童顔に分類されるのかもしれない。『ただいま、クリスマス。ち、ちよつと、そこで助けたんだ。通報にあつた、のは、や、やつぱり、魔の者だった。この子らは、服を、魔の者に取り換えられてしまったらしく、てな』

噛み噛みである。リスニング難易度は相当に高い。しかし、取り替えるって、魔の者、少し親切じゃないだろうか。服取り上げるだけじゃないの。取り替えるの。

『何、またか！？』

またって、実際にあつたことなのか。魔の者、親切なのか。

『と言うことは、また、人間に成りすまして来るやつがいるのかもしれないのか。大変だったな、君たち。レッドブリックの子供じゃないよな。どこの子たちだい？送って行ってあげよう』

百八十はありそうな、クリスマスと呼ばれた男性が腰を曲げて私たちに話しかける。一番背が高いからか、それとただ単に私の大人才ーラが足りないのか、はたまた、美少女だからか、クリスマスさんの視線は恵美理ちゃんの方だ。

「え……」

英語のわからない恵美理ちゃんが戸惑う。その様子に、クリスさんは首をかしげ、その斜め上の彼の死角で、エリックが慌てたように口に指をあてている。

『彼女はさつき魔の者に襲われたせいで、まだ混乱しているみたいなんです。えっと、私たちは、これからレッドブリックに草を売りに行く途中だったんです』

日本語を話すな、という意味だと受け取り、私は恵美理ちゃんの前に立ち、パーカーに包んでいた草を一本抜いて、見せる。パーカーに目をつけられると困るから、パーカーは斜め後ろに持って、クリスさんの注意を手を持つ、青い花をつけた草に集中させる。

『草？って、これは！』

クリスさんの目が開かれる。見ると、エリックも驚いたような顔をして私の手元を見ていた。

まずかっただろうか。現物を見せるのはやめた方がよかったか、と若干後悔しつつ、出してしまったものはしょうがない、とクリスさんの目の前にかざし続ける。

しかし、もし人に見せてはまずいものだったとしたら、精霊さん、ちよっと恨みます。

20. (後書き)

今日は、土曜日なので、二本立て。もう一話は夕方6時更新予定です。

『な、何か変ですか。私たち、この草見つけたの、初めてなんです。売れるものじゃないですか』

少し引け腰になりながら、問いかけると。思っていたのと百八十度反対の答えが返ってきた。

『すごい！』

クリスさんは目をキラキラさせながら、私の持つ草に目を向ける。精霊さん、ちよつとでも恨もうなんて思っでごめんなさい、と心の中で謝る。どうやら、悪いものではなかったらしい。

『精霊草の、青い花なんて、なかなか見つけれないのに！これ一本で、オレが一週間働いた分の金になるよ！』

自警団、とやらの給料がいくらかは知らないが、パーカーの中に束になって入っている分も合わせれば、この青い花だけでクリスさんの三か月分の給料と同じ位にはなるということだろう。他の草の価値がどんなものかは知らないが、とりあえず、結構なお金になりそうだ。

『一体、どこで見つけたの？』

よかったよかった、と胸をなでおろしていると、クリスさんが尋ねてくる。

ぴきり、と固まってしまった。

はたして、神殿の地下通路から出たところの野原は、答えていい場所なのだろうか。と言うか、恵美理ちゃんの平面ジェットコースターで移動していたから、どれくらいの距離が離れているのかわからないのだが。知られても大丈夫なことなのだろうか。精霊術師っ

て、どういう立場なのだろうか。

『あ、ごめん。そうだよ、商売だもんな。人には教えられないよね。困らせたね。いいんだよ、無理に聞き出そうとかじゃないんだ』
固まる私をどういう風に捉えたのか、クリスさんが謝ってくる。

いい人である。比べる状況がずいぶん違うとはいえ、エリックとは大違いである。イケメンだし。この部分がやはり、エリックとの間に差を作っている原因の一つであるのではないか、と言われると、否定はできない。恵美理ちゃんや白兔くんほどではないが、クリスさんはエリックと同じような髪と目の色で、背が高く、体格のいいところもエリックと同じだったが、イケメンだった。外国人マジックというだけではない。同じく外国人顔のエリックがかすんで見えるような、きり、とした目元に整った形の鼻と唇、それに、女としてうらやましくて仕方がない、滑らかな肌の、かっちょいい兄ちゃんである。

『あ、ありがとう』

お礼を言つと、クリスさんは『いや、こちらが悪いんだ。お礼を言われるようなことじゃないよ』と爽やかに苦笑した。目の保養だ。

『じゃあ、俺が御者やるから、エリックはこの子たちについててやりなよ。さ、乗って乗って』

ユニコーン車の扉を開けて、クリスさんは私たちに乗るよう促すと、御者台があるのであろう前方へと歩いて行った。それを、私たちと離れたかったらしいエリックが引き留めようとしたが、とつさに白兔くんが腕をつかむ手に力を入れたことで、何も言わず、諦めたようだった。

車の中は、四人乗りらしく、二人掛けのすわり心地の良さげな柔

らかそんなソファアが二つ、向かい合っていた。

まず、恵美理ちゃんが進行方向を向いて座り、次にエリックがその向かいに、続いた白兔くんは当然のように彼の隣に座った。エリックが護送される犯人のように見える。

地面と車体の床の間には結構段差があつて、三人は軽く上がつていったのだが、苦戦した私は白兔くんにつ張ってもらつて、恵美理ちゃんの隣に座り、扉を閉めた。

『んじゃ、出発するよ』

エリックと白兔くんの間に見える、二人の後ろの窓らしきものが開き、クリスさんが顔を覗かせ、出発を告げる。

窓が閉まると、ガタン、と車体が揺れて、少しずつ速くなる連続した振動が伝わり始めた。

「私、馬車に乗るの、初めてなんだよねー」

日本語で話すのはまずいようなので、クリスさんには聞こえないよう、小声で言う。

実際には「ユニコーン車」だが、とにかく、人生初体験の、動物の引く車が走り出したことに、私はわくわくする感情を隠せなかった。

多分、二人は馬車に乗ったことがあるのだろう。どことなく微笑ましいものを見る目で見られてしまった。一番大人なのに、恥ずかしい……。

「さつき、草を見せていましたが、どうでした？相手の方の表情で、悪いものではないという感じはしたのですが」

白兎くんが首を傾げる。そうだ、二人にこの朗報を伝えねばなるまい。

「うん、あのね」

『おい』

口を開いたとたんに、エリックの声にさえぎられた。むっとして斜め前の彼の顔を見ると、こちらもしかめっ面だ。ユニコーン車に乗る前からこうだけど。なんだか、少し深刻そうな顔なので、おとなしく話を聞くことにする。

『なんですか』

『もしかして、お前だけか？Language of Lastが話せるのは』

『最後の言語？なんですか、それは。今話している言語ですか？』

私だけが話しているのは、英語だが、最後の言語というのは、英語のことだろうか。

『ああ。もしかして、知らないのか？お前ら、どこから来た？もしや、魔界か？魔の者にはこの言葉は話せないはずだが……』

エリックの視線が鋭くなる。それを見て、恵美理ちゃんと白兎くんの視線も険しくなり、エリックは迫力負けして竦んだ。美人さんの眼力はすごいからー。

『私たちは人間です。魔の者って、なんですか』

地球からー、って言うて通じるかどうかかわからないので、そこはスルーして、先ほどから気になっていた、man of devil（魔の者）について尋ねてみる。

『ま、じゃなきや精霊術は使えねえだろうしな。よく考えてみりゃユニコーンも騒がなかったし。しっかしお前、ほんとにどこから来たんだ？Lastの外から来る、化け物だよ』

エリックが変なものを見る目で私を見る。しかし、その視線は先ほどより幾分柔らかだ。どうやら、人間認定がもらえた、のだろうか？随分簡単に行きすぎている気がするが。まあ、疑われないのはいいことだ。油断させておいて、という意図だったとしても、英語の通じてない白兎ちゃんと恵美理ちゃんの警戒は解かれていないし、大丈夫だろう。……年下の二人に頼り切りの自分がちよつと情けない。いやいや、ここは私だつて頑張れる。二人のためにも、情報収集をするのだ。

『最後の外？』

『ん？もしかして、お前、Lastの意味を取り違えてんのか？この場合は固有名詞だ。人間の住む世界のことだよ』

ついには呆れたような、気の抜けた感じの視線になった。副音声で『なんも知らねえあー』って聞こえた。う、うざい……。我慢だ、自分。

つまり、ここはラストと呼ばれる、いわゆる、人間界ということか。先ほどからエリックがたびたび口にする魔界（The world of demons）がその周りにあつて、魔の者というのは、そこからラストに入ってくるのだろう。では、Language of Lastは、最後の言語、ではなく、ラストの言語、つまりラスト語、という訳になるのかもしれない。

『ラストがこの世界の名前なんですな。では、エリック、earthって知っていますか？』

知らないだろうな、と思っていた。なんとなく、聞いてみただけ

なのだ。

しかし、私の予想は外れる。

『当たり前だ！』

エリックは頷いて見せる。

『悪を打ち倒す方、勇者さまを女神さまが育てておられる世界のこ
とだろう？そのアースから今日、聖女さま、賢者さま方と共に、ラ
ストにお帰りになったじゃないか』

ストール集団が呼び出していた三人に呼びかけていたのと同じ呼
称が出て、じわり、と背に汗が滲む。

『勇者？エリック、勇者ってなんですか？どういうモノなんですか
？帰ってきたって、どういうことですか』

ああ、なんだろう、すごく、嫌な答えを聞いてしまう気がするの
に、聞かずに居られない。

エリックは今、勇者が「帰ってきた（came back）」と
言った。

ストール集団は、召喚（summon）と言っていたはずなのに
……。

22。(後書き)

この小説は、文法には、泣かされた覚えしかない人間が、そういう英語（&日本語）文章能力で書いているものです。

日本語、英語問わず、「おかしくね？」と思われるところがありましたら、お知らせください。お知らせくださるときの文章は、日本語だと大変助かります。

設定的に、英語の文法が重要（になるかもしれない）なので、間違っていたらちょっとやばい……

エリックは、何やら得意そうな顔で、『これは、一般常識のはずなんだけどな』と前置きして、説明を始めた。

『勇者さまというのは、今言っただろ？悪を打ち倒す方のことだ。先代の勇者さまと聖女さま、賢者さまが皆亡くなると、光の女神さまによって、新しい勇者さまの魂が生まれるだろ。そして、アースで人として育てるんだ。すると、ラストの人間よりもずっと力のある人間になるらしい。同じような時期に、聖女さまと賢者さまも生まれる。そして、その三人は十分成長したころ、魂の生まれたラストに帰ってこられる』

『エリック、勇者は役割を終えれば、アースに帰りますか？』

私の声が震える。

『いや。なんでだ？勇者さまの故郷は、ラストだ。アースから、ここに帰ってくるんだぞ？しかも、勇者さまの役割に終わりはないんだ。役割が終わったら、なんて仮定、絶対、少なくとも、これから数百年は成り立たない』

私の想像した通り以上の、いや、以下なのだろうか、とにかく、悪い知らせである。終わりのない役割を課せられているって、勇者、悲惨だな。

私の顔色も、相当悲惨なのだろうけど。

二人が心配そうに私を見て、またエリックを睨んでいる。しかし、今の私は、二人へのフォローをしている余裕がない。私の頭の中で、ストール集団の言葉が蘇り、よろしくない想像が膨らむ。そして、最悪なことに、つじつまが合ってしまうのだ。

「You might be surprised to be summoned out of the blue.」という言葉、私は「突然の召喚で、驚かれたでしょう」と頭の中で訳した。

あの時は、「勇者召喚の儀式」だという思い込みがあったから、「summon」イコール「召喚」だと思っていたのだ。

summonという言葉の意味は「呼び出す」。

それは、多くの場合、召喚の意味で使われるが、召還、つまり「呼び戻す」という意味で使われることがないわけでは、無いのだ。

「You might be surprised to be summoned out of the blue.」は「急に呼び戻されて、驚いたでしょう」とも訳せる。

ならば、恵美理ちゃんが精霊さんに教えられたように、ストール集団が使っていた精霊術に、こちらの世界に「呼び戻す」術しかなかったということも合点がいく。彼らはただ、この世界で生まれた魂を帰還させるための儀式しか必要としていなかったからだ。

地球に送るのは、女神さまがしてくれるのだから。

車が大きく揺れて、体が前に倒れかける。それを恵美理ちゃんがとつさに支えてくれた。

「あ、ありがとね」

「うっん、大丈夫？ 千草さん。顔色が悪いわ。こいつ、何言っただの？ 腹に穴開ける？」

恵美理ちゃんが真面目な顔で言う。それに、少し笑ってしまった。
「はは、ありがと、恵美理ちゃん。エリックのせいじゃないよ。でも、ちょーっと大丈夫じゃないかも」

「千草さん？」

白兔くんが心配げに私の顔を覗き込む。恵美理ちゃんも、同じような表情で、私の背中をさすってくれる。

そうだ。私は、この二人のためにも、情報を集めなくては。それは今、私にしか、できないのだから。考えなくては。私たちが何であるのか。

一人だったら、とうに崩れ落ちていただろう私の心を支えてくれる、この、同胞たちを、私なりに守らなくては。

「もうちょつと考えがまとまったら、聞いてくれる？ 私の話」

「当たり前」

「待っています」

こうやって、迷いなくうなずいてくれる子たちを、導ける人間になるのが、私の役割なのだと、強く、思った。

23。(後書き)

第一章、終。

失敗した召喚（始）Ⅱ始まり編は、ここまでです。

お付き合いいただき、ありがとうございました。

第二章は、11月7日（月）から更新開始の予定です。

大きく揺れた後、ユニコーン車は揺れなくなった。

『町に着いたみたいだな。おい、お前ら、ややこしくなると困るから、他の人間のいるところでラスト語以外は喋んなよ』

エリックが私を見て言う。二人に伝えろ、ということだろう。

「町に着いたつて。町では、英語以外は話さないでね」

「はい」

白兎くんは短く答えて、頷く。

「フランス語も？」

首をかしげる恵美理ちゃんに、ちよつと考えて、白兎くんたちの座る後ろから、クリスさんが御者台から降りたのか、ガタン、と音がしたのに慌てて、「必要最低限でお願い」と答える。

『さ、町についたよ。変な格好で人前には出たくないだろうから、自警団の詰所の裏に車はつけた。降りて降りて』

扉を開けて、クリスさんが言う。変な格好つて言った、この人。

まず、私が飛び降りて、クリスさんに礼を言う。変な格好とは言われたが、ここまで御者をしてくれたことに、まず感謝しなくてはならないだろう。変な格好とは言われたが。

次に恵美理ちゃん、白兎くん、エリックの順に降りてくる。なんとなく、もうエリックは警戒しなくていい気がするのだが、二人は油断なくエリックと、クリスさんも観察している。

「Say thank you to them」

そんな二人をちよいちよいと突いて、ゆっくりと「ありがとうつて言つて」と言つてみる。意味は通じたらしい。二人は頷いて、クリスさんとエリックさんを見、声をそろえて言う。

「Thank you！」

下地（恵美理ちゃんはフランス語、白兔くんはドイツ語）の違いだろうか、もしかしたらネイティブには違って聞こえるかもしれないが、とても横文字に慣れた感じの発音だった。

クリスさんは少し驚いたような顔をしたが、すぐににっこりと笑つて「いいえ、どういたしまして」と答えると、再び御者台に乗つて、去つて行つた。

「クリスさん、行つてしまったのは何故ですか？」

ユニコーン車の後姿を見ながら首をかしげる。

「ああ、あれは町長からの借りもんだから。返しに行ったんだ」
そういえば、街道脇でそんな言葉を聞いた気がする。

「おい、入るぞ」

小さくなつていく車の姿を見てみると、頭を掴まれ、横を向かされた。

「止めて。痛いです。……レッドブリックですね」

朱色、橙色、少し黒。そんな色合いのレンガ造りの建物があった。おそらく、クリスさんの言つていた『自警団の詰所』だろう。

「おう。町の名前の由来だからな。この町の建物は、ほとんど赤レンガでできてる」

頭から手を放してくれたので、エリックを見ると、恵美理ちゃんが右足を、白兔くんが左足をそれぞれ踏んで、ぐりぐりと体重をか

けていた。ありがとう、二人とも。なんだか、白兔くんのアイアン
クローへの仕返しか、と思う程度には痛かったので、助かった。で
も、もう頭から手は退いたから。エリックの額に汗が浮いてきてる
から。そろそろ止めてあげて。

赤レンガの壁に、埋まるようにして、黒い扉があった。腰のベルトについているポーチから取り出した鍵を差し込んで回し、エリツクが扉を開ける。

『さつさと入れ』

少し、偉そうである。確かに、色々便宜を図ってもらっているし、これからもその予定ではあるが、これは、少しむかつくものがある。しかし、扉を開けて待っていてくれるのは、紳士な態度と言えなくもないかもしれない。

私たちは、段差のない、少し高い位置にある入り口をくぐった。恵美理ちゃんは、特に苦も無く、普通の階段を一段のぼるような感じで。白兔くんは、軽く飛び上がって。私は、「よっこらせ、」と掛け声をかけながら、少し階段を一段飛ばしで上がるような動作で。二人の動作の軽さに比べて、自分の動作のゆっくり具合ときたら……長い脚が運動神経のいい体、もしくはその両方がほしい。

『台所ですか？』

『そうだ。ま、使ってないけどな』

扉を入ると、そこには広い台所があった。レンガ造りの壁がむき出しで、床はタイル張り。部屋の中心に広めの、長方形の木のテーブルがある。私たちの入ってきた扉の左に、大学の近所の本格窯焼きピザのお店にあったような、大きなオーブンのようなものがあった。机を挟んで反対側にはコンクリートのような灰色の平らな石の上に、L字型に曲げられた太い金属の棒が三本、曲がった先を向い合せて並んでいて、真ん中に天井から鎖とその先についたフックが下がっている。三本一組が間隔を置いて四組並んでいる間には、灰が落ちている。想像するに、この三本の金属に鍋などを乗せて、そ

の下で薪か炭を燃やして調理するコンロのようなものだろう。鎖とフックは何に使うのか少し謎だが。コンロやオーブンのない壁にはいくつか棚が並び、結構な数の食器類が収められている。

しかし、エリックの言うとおりこの台所は使われていないらしく、食材が置かれている様子はなく中心のテーブルにはうつすらと埃が積もっていた。なんてもったいない。

『今はみんな詰所にいるはずだ。が、いつはち会うかわからん。さつき、クリスに言った設定は覚えているな？』

『私たちは草を売りに来る途中に襲われて、私たちが変な格好をしているのは、魔の者に襲われたから、ですよ。変な格好してるのは。変な格好を』

変な格好、を強調する私に、エリックは不思議そうな顔をして、『それでいい』と頷いた。スルーか。実際エリックたちには変な格好にしか映らないのだろうから、仕方ないのか。

エリックの心配は、杞憂だった。

私たちはエリックに連れられて台所を出て薄暗い廊下を進み、階段を上って二階に上がり、一つの部屋に入った。そこにはクローゼットや箆笥があつて、エリックはそのうちの一つのクローゼットを開くと、私たちの方を向く。

『ここに、自警団の人間が仕事の時着る服がある。オレの私服じゃ、でけーだろ。男物しかないが、サイズはいろいろあるから、とりあえずこれを着とけ』

礼を言って、二人にエリックの言った言葉を伝えると、二人も英語（あ、ここではラスト語か）で礼を言った。

『どーいたしまして。じゃ、オレは部屋から出てるから、さっさと着替えるよ』

エリックが部屋から出ようとするのを、白兔くんが腕を掴んで止めた。

『え、な、なんだ？』

エリックは少し引きつった顔で、戸惑う。すっかり白兔くん腕力がトラウマになっているようだ。

「千草さん、この人は何故部屋から出ていこうとするのですか」

白兔くんがエリックを警戒心のこもった視線で見上げながら、問う。

「私たちが着替えてる間、部屋から出ていてくれるらしいよ」

「それは、ありがたいけど、目を離してる間に仲間と呼ばれたら、困るわよね？」

恵美理ちゃんが眉間にしわを寄せる。ダメだよ、恵美理ちゃん。

美人さんなのに、眉間にしわが残っちゃったらどうするの。しかし、エリック、信用がない。私の警戒心が薄いのだろうか。

「そうだ」

白兔くんが何か思いついた、というように手を打ち、言う。

「僕が先に着替えます。そして、この人と部屋の前で待っていますので」

確かに、ちょっとした危険も避けるために万全を期すことは大切かもしれない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0967v/>

失敗した召喚（仮）

2011年11月8日07時12分発行